硬貨は掌の中に

すみ鯨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
硬貨は掌の中に

【Ｎコード】
Ｎ７８０４Ｊ

【作者名】
すみ鯨

【あらすじ】
英会話の講師である水野圭は、副業で探偵まがいの仕事も請け負っていた。ある日、彼の元に女性を無事連れ出すという依頼が入る。彼女を連れ出すことには成功した圭だったが、それはこれから巻き込まれる事件の序章に過ぎなかった。

プロローグ　（1）

のしかかる男を押しのけるようにして、女が立ち上がった。テーブルの上に積んであった
ダイレクトメールが崩れて落ちた。

「辞めさせてもらいます」

乱れた服を直しながら女が言った。男の表情が固まる。

「辞める？そんなこと許すわけねえだろ」

激昂こそしていないが、男の口調には明らかに怒気が含まれていた。男が立ち上がり、
女が一歩あとずさる。男が更に一歩前に出た瞬間、インターホンが鳴った。

女は自分の鞄を引っつかむと、扉に飛びつく。誰でもいい、人が居合わせてくれるのは
ありがたかった。

「遠藤有紀さんで間違いありませんね？」

予想外に自分の名前を呼ばれ、女が戸惑いの表情を浮かべた。そこには男が一人

立っていた。

「遠藤由紀さんで間違いありませんね？」

「あ、は、はい」

同じ質問を繰り返され、遠藤有紀と呼ばれた女はやっと返事をした。

「斉藤さんに頼まれてあなたを迎えに来ました。荷物はそれだけですか？」

有紀が頷くと、男は外へ出るように促した。

「おい！」

有紀と同様にこの状況に戸惑い、固まっていた男が声を荒げた。お前はなんだと

喚きたてる声は、既に落ち着きを失っていて、怒声に近い。

「聞こえませんでしたか？」

取り乱す男とは対照的に、あくまでも冷静な、抑制の効いた声が答える。

「僕は彼女を迎えに来たと言ったんです」

低いけれどよく通る声だ。顔は男の方へ向けたまま、彼は再び有紀に外へ出るよう促した。

有紀が扉の外へ出たのを確認し、続いて自分も外に出ると、ゆっくりと扉を閉めた。

その間も、射るような視線は男から一瞬たりとも逸らさない。エレベーターホールへ出て、

ボタンを押す。エレベーターは一階にいた。

「あの、あなたは誰ですか？」

無事に部屋を出られたとはいえ、有紀はあいかわらず状況が飲み込めない。

「僕は水野圭といいます。さっきも言いましたけど、斉藤さんに頼まれてあなたを迎えに

来ました」

先ほどよりはいくらか表情が柔らかく見えた。声も少し高い。と、二人の後を追いかけるよう

にして部屋の扉が開いた。手近にあったものを掴んできたのだろう、男はマグカップを

手にしていた。

エレベーターはまだ一階にいた。

勢いよく飛び出してきた男だったが、扉のすぐ外で足が止まった。

有紀を庇うように立つ圭。
その顔からはまた表情が消えていた。圭に射るような目線を向けられ、男は気勢を
そがれた。
「くそっ！」
苦し紛れにマグカップを投げつける。圭は右足をひょいと上げ、足元に飛んでくるそれを
避けた。床にぶつかったカップが砕け、中に僅かに残っていたコーヒーが飛び散った。男は
出てきたときと同じように、勢いよく部屋の中へ戻っていった。圭はそれを見届けると、
再びエレベーターへと目をやった。
表示が刻々と変化する。三階。四階、五階・・・。
エレベーターは二人の待つ六階を通過し、七階で止まった。有紀はちらちらと背後の扉を
気にしながら、再び尋ねた。
「あの、どうして私を迎えに来たんですか？」
「だから、斉藤さんに頼まれたんですよ」

圭はエレベーターのデジタル表示をじっと見つめている。その声にはさっきも言ったでしょう、

という呆れたような色が混ざっていた。

「いや、そうではなくて、なんで斉藤先生はそんなことをあなたに頼んだんですか？」

「・・・エレベーター、降りて来ませんね」

質問には答えず、一瞬の間を空けて圭はそう呟いた。

「もしかしたら」

あいかわらず圭はデジタル表示を睨んだままだ。

「このマンション、七階も彼の部屋なんです。部屋の中にある階段で自由に行き来が

出来ますから、もしかしたら彼が七階でエレベーターを止めているのかも」

子供じみた抵抗、というわけか。

「非常階段を使いましょう」

有紀の手を取ると、非常階段へと続く扉を開けた。

「さっきの質問の答えですけど」

手を引きながら、階段を下りる圭が話し出した。

「僕は英会話の講師なんですけどね。副業で探偵みたいなこともやっています。

依頼されれば素行調査から引越しの手伝いまで、なんでもやります。まあ、引越しの手伝い

の依頼はまだ来たことがありませんけど」

口調こそ少し柔らかいが、その表情は相変わらず固い。

「あなたが今日別れ話をするが、相手の男が素直に飲まないかもしれない。だからあなたを

無事連れ出して欲しい。それが今回僕の受けた依頼です」

圭はあえて「別れ話」という言い方をした。

プロローグ　（2）

依頼を受けたのは昨夜。ほんの十数時間前だった。夜十一時過ぎ、朝井から

電話があり、お前向きの依頼があるからやらないか、と言う。

「ただ・・・」

と朝井は続けた。朝井は中規模の探偵事務所を経営している。圭の職業は英会話

講師だったが、かつての経験を買われ、雇われ探偵のような仕事もしていた。

朝井は時間や人手不足などの理由で受けられない場合、圭に依頼を回してくることが

あった。

「時間がないんだ」

彼によれば仕事は明日、女性を無事外へ連れ出して欲しいという内容だった。

こういった依頼の場合、綿密な打ち合わせと下見が鍵となる。時間がないというのは

ある意味致命的な状況であった。

「断ってくれても構わない。今回の依頼はあまりにも急すぎる」
「いや、話だけでも聞きますよ。依頼主とは話せるんでしょう？」
少し考えて、圭はそう返事をした。
三十分後、三人はテーブルを挟んで座っていた。時間が遅いので店内には人影もまばらだ。三人はなるべく周りに人が居ない、隅の席を選んだ。圭が依頼主の小柄な女性と名刺を交換した。女性の年齢は五十代半ばだろうか。
「水野圭です。まあ、朝井さんのところの下請けみたいなものだと思ってください」
「下請け、ですか？」
下請けと聞いて依頼主の表情が曇った。それを見てすかさず朝井がフォローを入れた。
「いや、彼はこう言いますがね、私はそんな風には思っていません。ことこういった事例に関しては。今回のように時間が限られていてはなおさらです。そこいらの中堅

探偵よりずっと腕は確かです」

目の前で褒められて、圭は僅かにはにかんだ。

「では、もう一度依頼の内容について聞かせていただけますか？」

圭に促され、依頼主の女性が話し始めた。

「私は斉藤範子といいます。S大学で美術史を教えています。お願いしたいのは

教え子のことで。彼女は卒業後にとあるデザイナーのアシスタントとして働いているの

ですが、そのデザイナーがちょっと、なんというか、問題のある人なんです」

斉藤範子はそこで一息つき、湯気の立つカフェラテに口をつけた。

「問題というのは？」

圭はタイミングを計って話の続きを促した。もしこの依頼を受けるとすれば、一分一秒

でも時間が惜しい。

「はい。ひとつは素行、というか私生活で。新進気鋭のデザイナーなんて言われて

いましたし、人気があるせいか女性関係の噂が絶えない人なんです。あくまで
噂ですが、薬に手を出しているという話もあります」
「先ほどひとつは、と言いましたね。ということは他にもある？」
「実は仕事の方もあまり上手くいっていないようなんです。新人賞を獲ったくらい
ですから実力はあるのかもしれませんが、それも何年も前の話です。賞の上にあぐらを
かいて、最近はほとんど仕事らしい仕事をしている話は聞きません。今はアシスタント
をしている彼女が細々とした仕事をこなしているようです」
「そんな人物だとわかっていたのに、彼女を止めなかったんですか？」
斉藤範子は耳が痛い、というようにうなだれてしまった。もともと小さな体がさらに
小さく見える。圭はそのまま消え入ってしまいそうに感じた。
「私もあくまでも噂でしか知りませんでしたし、アシスタントに雇ってもらえると喜ぶ
彼女を見ていると強くは言えなくて。なにしろデザイン関係の就職

は厳しい状況が
続いているもので。気が付いたときには同棲のような状況になって
いて、
抜け出すのが難しくなっていました」
「それで、現実を知った彼女が彼の所を辞めたい、というわけで
すか」
「はい。ただ私にはすんなり辞められるとは思えなくて」
そこまで話して、斉藤範子はまたカフェラテに口をつけた。彼女
がカップから口を
離すのを待ち、圭が尋ねた。
「疑問があるのですが、あなたと話せるということは、簡単に外
に出られるの
でしょう？そのままＤＶシェルターのようなところに駆け込んだら
どうです？」
「私もそれを勧めたのですが、直接辞める意思を伝えると言って
聞かなくて。すでに
貴重品の類は持ち出して私が預かっています。あとは彼女だけなん
ですが」
そこまで言うと、斉藤範子はカップを見つめたまま押し黙ってし

まった。三人の間に
沈黙が流れた。それを破ったのは、それまでずっと黙っていた朝井だった。
「で、どうする？」
朝井と斉藤範子、二人の視線が圭に集まった。
時間がないというのは厳しいが、出来ない内容ではない。それにこういった仕事は
圭が得意とするものだった。
「請けましょう」
ほんの少し考えるような素振りを見せたあと、圭はあっさりと答えた。
「事務所の住所はわかりますか？」
それを聞いて斉藤範子の表情がぱあっと明るくなった。朝井もホッとしたような表情
を浮かべていた。彼女は手帳を取り出すと、そのなかから一枚破って内容を書き
写した。住所は電車を乗り継いで三十分ほどかかる所だが、タクシーを使えば

その半分ほどの時間で行ける。

「わかりました。メールは使えますか？ではなるべく最近撮られた彼女の写真、名前、

身体的特徴、これは身長や体重ですが、わかる範囲でいいので、それらを私の

パソコン宛に送ってください。アドレスは先ほど渡した名刺に書いてあります」

彼女はひとつとして指示を聞き漏らすまいと、内容を熱心にメモした。

「細かい契約の内容については朝井さんにお願いします」

そこまで話すと、圭は手付かずのコーヒーを置いて席を立った。

「さて、彼は仕事を始めたようですから、私たちは契約の内容について

詰めましょうか」

ニッコリと笑顔を浮かべ、朝井は斉藤範子の向かい側へと席を移した。

プロローグ　（3）

　席を立って二十分後、圭はマンションの前を歩いていた。まずはゆっくりと歩いて

その前を通過する。あくまでも、ただ通りかかっただけだ、という雰囲気で。二重に

なった自動ドア、恐らくオートロックだろう。そのすぐ脇には非常階段の出入り口が

ある。こちらもオートロックだろうが、外から死角になる分こちらの方が侵入経路には

良さそうだ。足を止めずに観察を済ませると、そのまま前を通り過ぎた。

　その足で一度大きな通りへ戻り、コンビニでメロンパンとお茶を買った。それを手に

同じ経路でマンションの前へと戻った。周囲をさっと見渡し、非常階段の前に立った。

ポケットから携帯を取り出すと、ストラップをスライドさせ、金属製の器具を二本取り

出した。それを鍵穴に挿し入れると、あっという間に扉が開いた。

圭は流れるような

動作でマンションの中へ侵入した。彼の動きはネコ科の野生動物を思わせた。決して
筋骨隆々というタイプではなく、一見華奢にもみえる。しかしよく見れば全身に均整の
取れた筋肉がついており、それがしなやかに躍動するのがわかる。
圭はするすると
六階まで階段を登ると、再びストラップを取り出して鍵を開けた。
扉には大きな
すりガラスがはまっていた。扉を僅かに開け、隙間から中を覗く。
誰もいないことを
確認して彼はエレベーターホールに足を踏み入れた。このマンションは各フロアに
一部屋ずつしかないらしい。重厚な扉の脇には「Ｋｕｄｏ
設計事務所」という表札が
かかっている。アルファベット部分は流れるようなイタリック。いかにもデザイン事務所
といった趣だ。電力メーターが動いているから、中に人が居るとみて間違いない
だろう。斉藤の話によれば、ここが事務所兼住居であるらしい。
あとは踏み込むタイミングか。

圭はエレベーターに乗り込むと、堂々と正面ロビーから外へ出た。その際に郵便
受けの中身をチェックするふりをして、事務所宛のダイレクトメールを一通抜き
取った。一度自分の部屋に戻り、準備を整える必要があった。
圭は再びタクシーに乗り込み、自宅へ戻った。パソコンを立ち上げるとメールが二通
届いていた。一通は斉藤範子から。必要な情報が書かれており、ちゃんと写真も添付
されていた。写真には女性が二人写っている。一人は依頼をしてきた斉藤範子だ。
卒業パーティーかなにかで撮られた写真らしい。二人ともドレスアップをし、笑顔を
浮かべている。多少アルコールが入っているのだろう、頬にはうっすらと赤みが
さしている。斉藤と一緒に写っている女性、今回圭が連れ出す女性は遠藤有紀。
メールによれば年齢は二十三。線の細い美人だった。
本文にはデザイナーのホームページアドレスも記載されていた。

それらをプリント
アウトして、目を通しながら買ってきたメロンパンを食べた。それによれば問題の
デザイナーの名は工藤信也。歳は三十二。切れ長の目、通った鼻筋、確かに女性に
モテそうな顔立ちだが、色白で軽そうな印象を受ける。趣味はギター、狩猟、スノー
ボードらしい。どこかの山でスノーボードを滑る様子や、猟銃を手に、獲物と見られる
大きな熊と写る写真がアップされていた。食事を終えてもう一通のメールを開くと、
こちらは朝井からだった。
―　契約まとまりました。所要二日でトラブル解決の基本料金が九万円。ただし急ぎ
のために三割増で十一万七千円プラス諸経費。後日領収書を持ってきてください。
今回もいつもと同様に仲介料は一割で。経費として五万円を口座に振り込んで
おきました。ギャラの先払い分だと思ってください。幸運を。―

現金はあとからコンビニで引き出すとして、まずは必要な準備だ。
圭は抜き取って
きたダイレクトメールの底を二センチほどクラフトナイフで開いた。
続いて机の中から
ＵＳＢメモリー型の盗聴器を取り出し、それを封筒の中に入れた。
落ちてこないように
封筒の奥へと押しやると、開いた部分を慎重に糊付けした。もう少
し小さいものが
用意できればよかったが、時間がないのだから仕方ない。シャワー
で汗を流し、白い
Ｔシャツとジーンズに着替えた。少し眠っておきたいが、移動する
タクシーがいなく
なってしまっては面倒なので、仮眠は現地で取ることとした。
コンビニで現金を下ろし、タクシーで再びマンションの前に戻っ
た。細工済みの
ダイレクトメールを郵便受けに戻し、自分は再び非常階段から六階
へ登った。受信用
のイヤホンを耳に入れ、携帯のアラームをセットすると、圭は非常
階段の隅に収まって
仮眠をとった。

圭は「ザーッ！」という雑音で目を覚ました。慌てて受信機のボリュームを調整

する。時刻を確認すると午前六時。目を覚ますのと、セットしていた携帯のアラームが

震えるのがほぼ同時だった。二人の内どちらかが（恐らくは彼女の方だと思うが）

郵便物を取ったのだろう。だとすれば十数秒後には彼女がエレベーターホールに

現れる。自分の存在を知らせるこれ以上ないチャンスだ。

だが万が一エレベーターを降りてくるのが工藤だったら？

この状況では扉にはめ込まれた磨ガラスが邪魔だった。確認のために扉の陰に

立てば、顔こそ見られないものの、影が映り込んでしまう。それに降りてきたのが

彼女だったとして、突然非常階段から見知らぬ男が出てくれば、悲鳴を上げ

かねない。

あまりにも危険すぎる。

圭は影の映り込まない位置に身を潜めた。
たっぷりと準備する時間があったら。彼女との打ち合わせる時間があったら。盗聴器
をダイレクトメールに潜ませる必要もなかったし、彼女が話を切り出す大まかな時間も
わかったはずなのだ。
とはいえ、たられば の話をしても仕方がない。それらを承知の上で仕事を請けたの
だから。扉が閉まる音を確認して、昨夜、現金を引き出すついでに買ってきた
メロンパンを食べる。圭は食べ終えるとジーンズの尻ポケットから文庫本を取り出して
読み始めた。
待つこと二時間。イヤホンを通じて聞こえてくる室内の様子が切迫してきた。
そろそろか。
文庫本をしまうと、圭はエレベーターホールへと移動した。
「辞める？そんなこと許すわけねえだろ」

工藤のその言葉を聞いて、圭はインターホンに手を伸ばした。

プロローグ　（4）

二人は六階分の階段を一気に下りた。圭は呼吸一つ乱れていないが、一方の有紀は少し息が上がっている。

「少し休みますか？」

その様子に気付いた圭が気遣う。有紀は大丈夫ですと答えた。依頼によっては対象を探し出すより、連れ帰るほうが大変だったりする。家出した高校生の娘や、出て行った妻の捜索なんて依頼もいくつかこなしたが、見つかったからといって「はい、じゃあ帰ります」とはいかないケースの方が多かった。今回は多少状況が異なるが、有紀が素直で助かる。いや、だからこそあんな男に捕まったのか。

圭は外の様子を伺うようにして、薄く扉を開けた。工藤の姿は見えない。外からロビーの中を覗くが、残念ながらエレベーターは死角になる。

「通りへ出てタクシーを拾いましょう」

そう言うと有紀の手を引いて歩き出した。マンションの横を通る小路を抜けた。道を
挟んだ隣は別のマンションが建設中で、白く背の高いフェンスが敷地を囲むように
ぐるりと巡らせてあった。
「あの、もう手を引いてもらわなくても大丈夫です」
それを聞いて有紀の手を離した。少し小走りになり、隣に並びながら有紀が礼を
言った。
「今日はありがとうございました」
「仕事ですから。それに斉藤さんの所へ送り届けるまで終わりじゃありません」
圭の口調はあくまでも事務的だったが、表情にはいくらか微笑みも浮かんでいた。
「いいえ、本当に助かりました。あそこで部屋のインターホンを鳴らしてくれなかったらどうなっていたか」
「ああ、それは」

盗聴器を、と言いかけて圭の表情が変わった。路上駐車している乗用車、その
サイドミラーに人影が映った。とっさに有紀を庇うようにして反転する。マンションから
出てきたのは工藤だった。両手で棒のようなものを抱えている。
「走れっ！」
瞬間、終始冷静だった圭が吠えた。言うが早いか、再び有紀の手を取り駆け出す。
握られていた棒がなんなのか、圭にはそれが一瞬で理解できた。ホームページで
見たあの写真。熊の横に立つ工藤が手にしていた散弾銃、モスバーグＥＰだ。
弾は？
写真の獲物は熊だった。ということは恐らく弾はバードショットでなくバックショット。
鳥など小さい獲物を狙うバードショットに比べ、鹿や熊など大きな獲物に使用する
バックショットは、一発に含まれる散弾の数が十分の一以下と少ない。それだけ命中

する可能性も低くなる。

大丈夫。まだツキがある。

とはいえ射撃に関して全くの素人というわけじゃない。落ち着いて狙いを定められる

のだけは避けたい。

乾いた銃声と共に、二人の後ろで乗用車のリアウインドウが砕け落ちる。

モスバーグＥＰの装弾数は二発。予め薬室に一発装填していたとしても、最大で三発

までだ。立て続けに二発目の銃声が鳴り響き、圭の足元でアスファルトが砕け

散った。

今ので二発。圭が肩越しに後ろを振り返る。

ポンプアクション。薬室に次弾を送り込む工藤が見える。

次がラストだ。

もし陰に入れるような車があれば、圭は周囲を確認する。三発目を外して新たな

弾を装填するとなれば、その隙に二人は通りまで出られる。そこまで行けば人通りも
多い。いくら頭に血が上っているとはいえ、さすがに人込みの中で散弾銃をぶっ放す
ような馬鹿はしないだろう。あとはタクシーに乗り込んでさえしまえばこちらの勝ちだ。

しかし隠れられるような場所は無かった。やむを得ず小路をジグザグに走る。

ドンッ！

三発目の銃声が響く。圭のすぐ右側、花壇を囲んでいたレンガが炸裂する。と同時
に右太腿に鈍い痛みがはしった。圭の体がバランスを崩す。転ぶ寸前、圭は類まれな
ボディバランスでなんとか耐えた。しかし手を繋いでいた有紀は、バランスを崩した圭
に引かれて転倒する。そして圭もその有紀に引っかかる形で地面へと転がった。

ツイてない。

突っ伏しながらも工藤を見る。工藤は新たに弾を装填するのではなく、真っ直ぐ二人

の下へ駆け寄ってきていた。それはこの日、工藤が犯した最大の判断ミスだった。

工藤と二人の距離が縮まる。六メートル、五メートル、四メートル・・・。

あと二メートル。あと一メートルだ。

それを目線だけで追いながら、圭は体勢を整える。地面に突っ伏してこそいるが、

両手と両足はしっかりと地面を掴んでいた。距離が二メートル程度なら一瞬で

詰められる。勝利を確信している工藤には必ず油断があるはずだ。

そして残り二メートル。機を伺っていた圭の身体が跳躍する。仕留めたと思っていた

工藤は完全に虚を衝かれた。工藤が気付いたときには、右手にぶら下げていた

モスバーグＥＰが圭の手の中にあった。圭はモスバーグＥＰの銃身を掴むと、工藤の

側頭部目掛けて振り抜いた。

八月十四日　午前十時　（1）

圭は有紀の横顔を見つめていた。有紀の後ろでは博多の町並みが流れていく。

それまでじっと窓の外を見ていた有紀が、視線を感じて振り返った。

「どうかしました？」

有紀が少し首を傾げた。まばたきに合わせて長いまつげがしばたく。圭は黙って首を横に振った。圭は二人が出合うきっかけとなった依頼について、そして博多に来る原因となった出来事について思い出していた。二人はタクシーの車内にいた。

有紀を連れ出してからおよそ一年。その日、買い物から帰った圭は、郵便受けに入った一通の封筒に気が付いた。郵便が来るような時間帯ではない。今朝届いた分は、とうに部屋に運んだはずだ。ダイアル式のロックを解除し、やや厚みのある封筒を取り出す。それを見る圭の眉間にしわが寄った。

それは奇妙な郵便だった。

いや、正確には郵便ではなかった。封筒には切手も消印もない。ただ宛名として

「水野圭様」と書かれているだけである。

買い物袋の中身を冷蔵庫にしまい、封筒を手にデスクに座る。光に透かして見た

が、中身は見えなかった。高価な厚手の封筒であるらしい。その口は蝋と焼印で封が

してあった。触ってみて中身が紙であることを確認し、圭はびりびりと封を切った。

驚いたことに送り主は工藤信太郎。有紀を連れ出したときに一悶着あった、工藤信也

の父親だった。中には一通の手紙とともに、羽田発博多行きの航空券と、対馬までの

高速船のチケットも同封されていた。手紙の内容はこうだ。

昨年、息子が起こした事件を大変申し訳なく思っている。私は対馬の西に浮かぶ

小島に別荘を持っていて、毎年夏に知人を招いて休暇を過すことにしている。お詫び

を兼ねて今年はぜひ招待したい。

工藤の父親というのは相当な資産家であるらしかった。信也が使っていたあの部屋

も、彼の父親が買い与えたものだったらしい。そのおかげでろくに仕事をしていなくて

も、住む場所にまで困るという事態にはならなかったのだ。事件から数日後には彼の

顧問弁護士を名乗る人物が現れ、慰謝料としてかなり多い金額を提示した。

手紙を受け取って数日後、圭の元に有紀から電話があった。

「突然電話してごめんなさい。どうしても相談したいことがあるんです」

直接会って話がしたいという有紀と、翌日に会う約束をして電話を切った。

翌日、待ち合わせた時間に圭が店に着くと、有紀はすでに座って待っていた。

入ってきた圭に向かい、ぺこりと頭を下げた。かなり早めに着いていたのだろう。

テーブルに置かれたグラスの氷がほとんど溶けきっていた。何か新しい飲み物を

買ってきましょうか、という圭の提案を有紀はやんわりと断った。

「お久しぶりですね。この一年間どうされてました？」

そう聞かれて圭は肩をすくめた。

「英会話教室が夜逃げ同然に閉鎖したのが、最近ニュースにもなったでしょう？僕の勤め先も似たようなことになりまして。講師の仕事は休業中です。副業の方をぽつぽつとこなしながら過していました」

「私はあのあと大学に戻ったんです。斉藤教授の助手として」

勝手知ったる大学なら働きやすいでしょう？という質問に、有紀は首を横に振った。

「それがまったく。当時私は当時学生でしたし、学生と職員では勝手がまるで違います。日々戸惑うことばかりで、最近になってようやく慣れてきたところです。それに学生の考えることもよくわからなくて。私が年を取ったせいじゃないと信じたいんですけど」

有紀は微笑んで、とうに薄くなったであろうアイスティーに手を伸ばした。会話が
途切れ、二人の間に静寂が流れる。圭もアイスコーヒーに口をつけた。

有紀と顔を合わせるのは、ほとんど一年ぶりだった。あの日、圭が握った
モスバーグＥＰは、的確に工藤の側頭部に命中した。綺麗に振りぬかれた一撃を
受け、今度は工藤が地面に転がる番だった。間もなくして、けたたましいサイレンと
共にパトカーが駆けつけた。ノックアウトされた工藤は警官に付き添われ、そのまま
救急車に乗せられた。救急車は二台到着し、二人はもう一台の救急車で病院へと
運ばれた。圭は右太腿から出血しており、救急隊員によって車内で止血処置が
施された。

病院に到着した圭は、簡単な診察のあとにレントゲンを撮られた。その結果、圭の

太腿には大小四つ、ごく浅いところにではあったが、レンガの破片が埋まっているのが見つかった。医師はそのまま処置室に運び入れ、局所麻酔を施すと、切開して破片を取り出した。

「持って帰りますか？」

処置を終えた医師は、シャーレに乗せられた破片を手にニコニコしながら尋ねた。

「処分してください」

圭がそう告げると、医師は机の隅にそれを置いた。

「麻酔も打ちましたし、二日ほど入院してもらいますが、荷物を持ってきてくれるご家族の方はいますか？」

思いつく限り、そんな人間はいなかった。入院着は貸してもらえるということで、下着や歯ブラシを売店で購入すれば、二日くらいはなんとかなるだろう。看護師に車椅子を押してもらい、処置室を出ると、有紀が斉藤と共に立っていた。

「遠藤さんに怪我をさせてしまい申し訳ありません」

圭が頭を下げると、斉藤も恐縮して頭を下げた。

「いいんです。膝をすりむいたくらい。その程度で済んだのは水野さんのおかげ

です」

そんなやりとりをしていると、看護師が一つの大部屋の前で向きを変えた。部屋の

中には六台のベッドが収められており、非常に狭い。その様子は野戦病院を連想

させた。

有紀に車椅子を押してもらい、売店で必要なものを買い揃えた。

一人で行けると

言ったのだが、有紀がどうしてもと折れなかったのだ。斉藤は一足先に帰っていった。

八月十四日　午前十時　（2）

翌日、圭がベッドの上で暇をもてあましていると、シュークリームを手に有紀が
見舞いに訪れた。
「足の具合はどうですか？」
「大丈夫です。もともとかすり傷ですから」
そう言って微笑むと、有紀が驚いた声を出した。
「意外に表情豊かなんですね。昨日はもっと石膏像みたいな人なのかと
思いました」
それを聞いて圭が噴き出す。
「そんなに面白いこと言いました？」
不思議そうに見つめる有紀に圭が謝った。
「すみません。石膏像に例えられたのは初めてだったので。仕事中は感情をあまり
表に出さないように心がけていますから、そういう風に見えるのかもしれませんね」

二人はシュークリームを食べながら世間話をした。

「明日退院なんですよね？」

口角についたクリームをふき取りながら、有紀が尋ねた。

「退院したら食事にでも行きませんか？どうしても昨日のお礼をさせていただきたいのです」

ありがとうございます、と言ってから、一息置いて続けた。

「お気持ちだけで十分です。それに報酬はちゃんと頂いていますから」

それでも有紀は引き下がらなかった。なかなか頑固なところがあるらしい、

どうしてもと言って譲らない。

「わかりました」

ついには圭が折れた。

「その代わり、お店はボクに任せてください。それでもいいですか？」

もちろん構わないと言って、有紀は携帯番号と住所を記したメモ

を置いて帰って
いった。
翌朝、圭は病院から自宅に向かう電車の中で、有紀にメールを打った。
「十六時に迎えに行きます。ほんの少しオシャレをして待っていてください」
そして十六時、圭はタクシーで有紀の部屋を訪れた。ベロアのジャケットを着た圭を
見つけると、小走りで近づいた。自動ドアを抜けて現れた有紀は、ブラウスの上に
白いカーディガンを羽織っていた。開いたドアの脇に立つと、頭がぶつからないよう
に、ドアフレームを手で押さえる。有紀が後部座席に収まり、圭が乗り込むと、何も
聞かずにタクシーが発車した。
「どこへ向かうんですか？」
有紀は期待七割不安三割といった表情で尋ねた。
「着いてからのお楽しみです」

とだけ言う圭はいたずらっぽく笑っていた。

タクシーは一軒のレストランの前で停まった。

「ここですか？」

圭はほんの少し左に頭を傾けると、有紀に歩き出すよう促した。

二人が扉の前まで

来ると、内側から扉が開かれた。背の高い外国人ウェイターが爽やかに出迎え、何も

言わずに隅の席へと案内した。

「ウェイターとも顔見知りなんですか？」

有紀が声を落として尋ねた。

「実は外国人向けの日本語講師もしていて、シェフがボクの生徒だったんですよ。

サービスしてくれるのでちょこちょこに来るんです」

有紀に顔を近づけると、小さな声で続けた。

「実を言うと、ちょっと不真面目な生徒なんですよ」

「聞こえてマスよ」

気がつくとテーブルの傍らに、コック帽を脇に抱えたシェフが立

っていた。がっしりと
した体格で、やや腹が出ていた。活力にあふれる雰囲気は若々しくも見えたが、
茶色い髪の毛には白いものが混じっていた。
「こちらがシェフのアレッシオです。僕が教えている中でも一番優秀な生徒ですよ」
圭が姿勢を正し、有紀にシェフを紹介する。アレッシオは満足気に笑顔を浮かべた。
圭に見えないように体を傾けると、そっと有紀にウインクした。
「今日もおまかせでいいデスカ？」
アレッシオが顔を圭に向き直り、尋ねた。圭が頷くと、軽く頭を下げてテーブルを
離れた。そこへ入れ替わりにソムリエがワインを手に現れた。
「一九九九年のタウラージです」
ワイングラスに赤ワインが注がれた。三四回グラスを回し、圭が一口含む。
「美味しいですね」
「でしょう？私もオススメのワインなんですが、先ほど帰られた

お客様は気に入ら
なかったみたいです」
有紀のグラスにもワインを注ぐと、ウェイターは圭にそう耳打ちした。ボトルを置いて
ウェイターが下がった。
「こんな馴染みの店があるなんて」
独り言のように有紀が呟いた。
「実は秘密があるんですよ」
そう言って圭がいたずらっぽく笑う。
「実はさっきのワイン、既にコルクが抜かれていたのに気がつきました？」
有紀が首を横に振った。
「ここのソムリエの舌は抜群なんですが、中には出されたワインが気に入らない人も
いるんです。一度開けてしまったワインは普通、他のお客には出せません。それに
このテーブルです」

「テーブルは普通ですけど」

有紀がテーブル表面を撫でた。

「ここは厨房の出入り口に近いでしょう？ソムリエやウェイターが頻繁に行き来する

から、シェフはお客を座らせたがらないんです。だから普段は花瓶の専用席

なんですよ。だから飛込みの上に格安で食事ができるわけです」

「なんだか手品みたいですね」

有紀はワイングラスを手にしたまま、ぱちぱちと目を瞬かせた。

「友達のよしみとはいえ、迷惑な客ですよね」

そう言って笑ったところに、ウェイターがピザを運んできた。

「マルゲリータインテグラーレです」

二人はピザに手を伸ばした。

楽しい時間はあっという間に過ぎた。

「さて、そろそろ行きましょうか」

腕時計に目をやり、圭が立ち上がった。ウェイターが開けてくれたドアを抜けた。

「あの、お支払いは？」

右手を上げ、タクシーを停める圭に有紀が尋ねた。

「チェックならさっき済ませておきました」

「そんな。それじゃあお礼になりません」

タクシーが停まり、圭が笑顔で振り向いた。

「いいんですよ。僕はすごく楽しめましたから。それだけで十分です」

完全には納得していない様子の有紀をタクシーに乗せた。

「講師特別価格ですから。気にしないでください」

自らも反対側から座席に納まると、そのまま有紀を送り届け、圭は帰路に就いた。

八月十四日　午前十時　（3）

有紀と顔を合わせるのは、あの晩以来だった。いくつか離れたテーブルで、楽しげに話す女子高生の声が聞こえてくる。どうやら学校に気に入らない教員がいるらしい。大きな声で辛らつな言葉を吐いていた。圭がカップから顔を上げると、それを待っていたかのように、有紀は鞄から一通の封筒を取り出した。その封筒には見覚えがあった。数日前に自分のところに届いたのと同じものだ。差し出された封筒を手に取り、じっくりと眺める。やはり切手や消印がない。封筒は丁寧に封が切られていた。

「中を見てください。三日前に届きました」

確かめるまでもなく、中身は手紙とチケットだった。手紙の内容まで判で押したように同じ。ただしパソコンで作成したものを印刷しただけというのではなく、どちらも綺麗な字で手書きされていた。

圭にとってこれは予想の範囲内であった。

彼女の方が、ずっと工藤信也の近くにいたのだ。圭に招待状が届くなら、有紀にも

届いていると考える方が自然である。それらに一通り目を通すと、圭も鞄の中から

封筒を取り出した。

「中身はあなたのところに来たものと同じです」

手紙をざっと読んだ有紀は、丁寧に畳んで封筒に戻した。その封筒を圭のほうに

押し返す。

「あまり驚いてはいないようですね」

「手紙の内容を読んで、もしかしたらと。確信があったわけではありませんけど」

自分の封筒を鞄にしまいながら有紀が続けた。

「それで、水野さんはどうするおつもりですか？」

圭はゆっくりと首を横に振った。

「僕は行きません。チケットも送り返すつもりです」

さも当然といった口ぶりだったが、これは半分本音、半分は嘘であった。圭にも
迷っている部分があったのだ。
「そうですか…。ご一緒していただければ心強かったのですが」
そう言うと有紀はグラスをストローでかき混ぜた。氷が溶けて、グラデーションを
描いていたアイスティーが均一になった。薄くなったアイスティーに目を落とし、
しばらくの間ぐるぐると液体を回していた。
グラスをテーブルに置くと、有紀は意を決したように視線を上げた。
「あの、それでは私にあなたを雇わせてください。一年前、斉藤先生が依頼した
ように」
ストローを弄ぶ有紀の手元を見つめていた圭は、左肘をテーブルに突くと、頬杖を
突きながら目の前に座る女性を見据えた。
「どうしてそこまでこだわるんです？この招待を受けることで、

あなたにメリットがある
とは思えない。私を雇うとなれば費用が掛かります。それは決して少ない額では
ありません。そこまでして行く理由はなんですか？」
その視線をまっすぐに受けとめて、有紀が答えた。
「事件の直後、私のところに来たのは本人ではなく、彼らの弁護士でした。それが
一年も経った今頃になって謝罪したいなんて。なにかおかしくありませんか？」
それは圭も感じていた疑問だった。しかしあえて同意はしない。
「この手紙が、ある種の脅迫を含んでいることに気づいていますか？僕の名刺には
住所の記載はありません。携帯電話の番号と、メールアドレス。名前の他はそれだけ
です。もちろん電話帳にも載せていない。その僕のところに封筒を届けたということ
は、『お前の居場所を知っている』という意思表示ともとれます。
それも郵送ではなく、
わざわざ自分の手で届けている。それを理解したうえで、それでも

確かめに行きたい
のですか？」
有紀は頷いた。
「そこまでして私たちを呼び寄せたいのには、相応の理由があるはずです」
隙間無くピッタリと合わさった膝の上に、両手が重ねて乗せられていた。バランス
よく配置された大きな眼に見つめられながら、圭は見た目とは裏腹なこの女性の強さ
を感じていた。自分の恋人、それも同棲していた相手にショットガンで撃たれる、
なんて経験は普通に生きていればまずしない。心的外傷後ストレス障害になっても
おかしくない。そんな経験をしていながら、この女性は抱いた疑問を解決するため、
自ら困難な状況に飛び込もうとしている。
確かに、この招待状はなにか変だ。百歩譲って有紀の元に招待状が届くとしても、
自分のところにまで送られてくるだろうか。かすり傷を負ったとは

いえ、所詮は仕事を
請け負っただけの人間に。その違和感がチケットを処分することを躊躇わせ、
受け取りから数日経っても封筒を手元に残させていた。圭は詰めていた息を大きく
吐き出し、両手をテーブルの上で組むと、まっすぐに有紀を見つめて言った。
「依頼はお断りします」
有紀の表情が明らかに沈んだ。
「でも島へはご一緒しましょう。実を言うと僕も同じ疑問を抱いていたのです。
それに」
言葉を途中で切ると、先を促すように有紀が圭の目を覗き込んだ。
「知ってしまった以上、勝手に行けとは言えません。一人で行かせるのは心配です
から」
ほっとしたように微笑む有紀の口元に、歯並びの良い真っ白な歯が覗いた。圭は

有紀の美しい顔立ちが、笑顔によってさらに魅力的になることを認めざるを
得なかった。

八月十四日　午前十時三十分　（1）

「良い天気になって良かった」

博多港に向かう車内で、再び窓の外に目を向けながら有紀が言った。空は雲ひとつ

無い快晴だった。車窓から射し込む陽の光を受けて、有紀の頬には長いまつげが影を

落としていた。

「ええ。だけど波は高いみたいです。なんでも台風が近づいているとかで。乗船する

予定の高速艇は波に強いそうですが、多少は揺れるんじゃないかな」

現在、九州の南には台風が接近していた。

「ずいぶんと大きな台風らしいですね。直撃はしないみたいですけど」

二人は昨日の昼過ぎに博多に到着していた。博多は天気が悪く、薄曇の空からは

しとしとと雨が落ちていた。移動による疲労を考慮してか、高速船のチケットは博多着

の翌日に取られていた。

「せっかくだからどこか行きません？私、行ってみたいところがあるんです」

生憎の天気とはいえ、はるばる博多まで来てホテルに篭っているのはもったいない。有紀の誘いに乗り、観光することにした。

曇り空に向かって伸びる福岡タワーは鈍く輝いていて、使い込まれた刃物を連想させた。

有紀の行ってみたいところ、とは友泉亭公園だった。雨の中の日本庭園は悪くなかった。むしろ晴れ空の下よりも、趣があって良いくらいだった。もらったパンフレットによると、池泉回遊式という様式の庭園らしい。たっぷりと和の雰囲気を楽しんだ二人は、夜には屋台街へ出かけ、一緒に夕飯も食べた。傍目に見れば、初々しいカップルに見えただろう。

博多港は思ったほど風は強くなかった。緩やかな風に吹かれ、タクシーを降りた

有紀の髪がなびいた。髪を抑える有紀の中指で、シンプルなデザインの指輪が
光った。二人の前に一隻の美しい高速船が停まっていた。川崎ジェットフォイル九二
九型、ヴィーナス二号という女神の名が付けられた船は、白い船体に赤いストライプ
が眩しい。最高時速約８３キロという速度で、博多対馬間をわずか二時間十分で
結ぶ。二人はヴィーナス二号に乗り込むと、窓際の座席に腰を下ろした。

午前十時四十分、ヴィーナス二号は定刻から十分遅れで博多港を出発した。川崎
ジェットフォイル九二九型は、高速航行に入ると船体が浮き上がる構造になっていて、
波の影響を受けにくい。そのおかげか揺れはほとんど無かった。

二人の傍らで通路を走っていた男の子が転んだ。何か買いに行くところだった
らしい、その手から数枚の硬貨がこぼれ落ち、一枚の百円硬貨が圭の足元まで

転がった。男の子はすぐに立ち上がり、放り出してしまった硬貨を慌てて拾った。圭は
右手で硬貨を拾うと、軽く握った拳を差し出した。
「ありがとう」
男の子が手を差し出し、その上で圭が右手を開いた。しかし百円玉は落ちてこな
かった。
圭が怪訝そうな表情を浮かべる。きょとんとする男の子を前に、圭が右手を軽く
揺すった。それでも百円玉は出てこない。男の子の顔がくしゃくしゃと歪み、今にも
その目からは涙がこぼれそうだ。
「あ、ごめん。こっちの手だった」
そう言って圭は軽く握った左手で、右手の甲をぽーんと叩いた。
その瞬間、まるで
右手を通り抜けるようにして百円玉が現れ、男の子の手に落ちた。
「危ないから走るなよ」
眼をぱちくりさせる男の子を笑顔で送り出し、圭が体勢を戻すと、

そこにはもう一人
目をぱちくりさせている人間がいた。
「今のどうやったんですか？」
笑顔を浮かべると、圭は財布から五百円硬貨を取り出し、それを右手で軽く握った。
有紀に手を出すように言い、その上で拳を開く。
やはり硬貨は落ちてこない。
「こういうことです」
開いた右手をひっくり返すと、硬貨は掌のちょうど真ん中にぴったりと収まっていた。
ひらひらと右手を振っても、それは変わらなかった。
「パームといってコインマジックの基本テクニックです。練習すればすぐにできるようになりますよ」
そう言って右から左、左から右へと硬貨を飛ばして見せた。次いでそれは吸い付いたように親指で運ばれ、親指から人差し指、人差し指から中指と、硬貨は指の付け根

でくるくると回り、差し出したままだった有紀の掌に納まった。

八月十四日　午前十時三十分　（2）

二時間後、二人は厳原港に降り立った。有紀はたっぷりとパームの練習をしたせいで、赤くなった掌をさすっていた。

「遠藤さんに水野さんですね？」

二人が並んで立っていると、一人の男に声をかけられた。

「オーナーに頼まれて迎えに来ました。夫婦で別荘の管理人をしています」

声をかけてきた男は古川正行と名乗った。彼に案内されてターミナルを抜け、駐車場に向かった。観光シーズンということで、ターミナルの中は家族連れで賑わっていた。びっしりと並ぶ車の間を抜け、彼はシルバーのＳＵＶの前で立ち止まると、テールゲイトを開けて荷物を詰め込んだ。

「どうして僕らだとわかったんですか？」

後部座席に乗り込みながら圭が尋ねると、ジーンズのポケットから写真を取り出して

見せた。一枚の写真が真ん中で二つに切られていた。ややシワのよった写真には、

有紀の姿が写っていた。

「仲が良さそうに歩いていれば、あなたが水野さんだろうという予想はつきます。お

二人は同じ便で着くと聞いていましたからね」

健康的に日焼けした顔がクシャっと笑った。

古川正行は車を発進させた。車は海岸を離れ、島の内部へと入っていく。その様子

を見て有紀が尋ねた。

「どこへ向かうんですか？てっきり島までは船で移動するのかと思っていたん

ですが」

「初めはその予定だったんですけどね、かなり波が高いのでボートは無理なんです。

このまま空港に向かいます」

「空港？無人島に滑走路を敷いたんですか？」

「いえ、さすがに滑走路はありませんよ。空港からはヘリコプターを使います」

まさかと笑い、古川正行が驚いた様子の有紀に答えた。ヘリコプターと聞いて圭が

顔をしかめた。

「相当揺れますか？」

「ええ、私は午前中にヘリで着いたんですが、それはもう」

古川正行はそう言って苦笑いを浮かべた。

「でもまあ、転覆しないだけボートよりはマシですよ」

有紀が不安そうに圭を見つめた。

八月十四日　午後一時　（1）

「到着です。大丈夫ですか？」

古川正行が外側から扉を開けた。圭が軽く右手を上げて答えた。酷いフライトだっ

た。唯一の救いはその時間が短かったこと。ヘリコプターは対馬空港を飛び立って、

わずか二十分ほどで目的の島へ到着した。そこはコンクリートで舗装されたようなヘリ

ポートではなく、一面に短い草の生えた空き地だった。圭が先に降り、有紀に手を貸し

た。

「地面が揺れないって素晴らしいです」

青い顔をした有紀がこぼす。

「冗談を言う余裕があるなら大丈夫」

圭が笑うと、本気ですと有紀は少し口を尖らせた。三人がヘリコプターから離れる

と、まだ完全に停止していないローターが回転を上げ、爆音を立てて飛び立った。ゆっ

くりと上昇していく機に古川正行が手を振る。右手で日差しをさえぎると、パイロットが
コクピットで敬礼しているのがちらりと見えた。ヘリコプターが頭を対馬の方角に向け、
すべるように飛び去っていくのを見届けると、二人分の荷物を抱えて古川正行が歩き
出した。空き地の隅には青いピックアップトラックが停まっていた。荷台部分に荷物を
載せると、古川正行が助手席側のドアを開け、前方にシートを倒した。

「ツードアですが、一応五人乗りです」

二人が後部座席に乗り込むと、シートを戻して運転席側に回った。未舗装の空き地
を走る間、トラックはがたがた揺れ、有紀が両手をぎゅっと握り締めた。力が入って
白くなった手を圭が包み込むように握ると、有紀は少しだけ微笑んだ。揺れたのは
ほんの少しの間だけで、トラックはすぐにコンクリートで舗装された道路へと乗り入れ

た。別荘までは十分足らずで着くという。窓が半分ほど開け放たれていて、心地よい
風が二人の頬をなでた。
車は美しい海岸線を走っていた。真っ白い砂浜にパステルブルーの海が広がる。
いかにも南国といった雰囲気だ。都内に比べると非常に広く作られた道路も、その
雰囲気作りに一役買っていた。湾の中は静かなもので、ほとんど波も無く、太陽の
光を受けてきらきらと水面が輝いている。外海はかなり荒れているのだろう。リーフが
途切れる辺りに、押し寄せては砕ける白波が見えていた。そのうちに車は海岸線を
離れ、緩やかな坂道を登ったかと思うと、別荘に到着した。
別荘はやや小高い丘の上に位置していた。地中海風二階建ての建物で、白く塗ら
れた壁に水色の窓枠がはまっている。青く塗られたアーチ型のドアを抜けると、そこは
ホールになっていた。一階と二階部分を区切る天井が取り払われ、吹き抜けになって

いる。高い天井はホールを実際以上に広く見せた。石畳の敷かれた床の上に、革張
りのソファと木製のテーブルが置かれていた。窓はそれほど大きくないが、白い壁に
光が反射して非常に明るい。壁際に階段があり、それがテラスのように突き出した
二階部分に続いている。二人の後ろから入ってきた古川正行が、扉を指差して説明
した。
「あのドアの向こうが食堂、正面のドアは娯楽室です。ここの娯楽室はなかなかの
設備ですよ。そこの階段を上って二階部分が客室になってます」
「あのドアは？」
説明の無かったドアを指差して圭が尋ねた。
「ああ、あれは私たち夫婦の部屋ですよ」
古川正行は荷物を下ろすと、二回三回と首を回した。
「座って待っていてください。鍵を取ってきますから」

そう言うと古川正行は自分の部屋に入っていった。

二人がソファーに腰掛けていると、食堂から恰幅の良い男が現れた。対照的に後ろ

からついてくる女性は病的に細い。

「工藤信太郎です」

男は二人の前に立つと、笑みを浮かべて右手を差し出した。金のロレックスが音を

立てた。

「いやあ、わざわざ遠いところどうも」

立ち上がり、圭が握手に応じる。

圭は昔読んだ児童書を思い出していた。ふとっちょとやせの兄弟が、乗る列車を

間違えて、とある駅にたどり着く。そこには二つの国があり、体型でデブの国とノッポ

の国に強制的に分けられるのだ。二つの国は習慣が異なり、そのうちに戦争が始ま

るのだが、結局は兄弟の尽力により二つの国が一つになる。体型で人を差別しては

いけません。人類皆兄弟。といった、ありがちな内容の本だった。

圭がまったく別のことに思いを巡らせているとも知らず、信太郎が笑みをたたえて妻

を紹介した。

「こっちは妻の奈緒子です。昨年はせがれが大変なご迷惑をおかけしました。その

お詫びといっては何ですが、ぜひ楽しんでいってください。サーフボードや小型

クルーザーからバイクまでなんでも揃っています」

「それはどうも」

圭も笑顔で答えた。男の周りには堂々たるオーラが漂った。それにどこか抜け目の

ないような、両手離しに信頼することができない雰囲気を兼ね備えている。そうでなく

ては大企業の社長は務まらないのかもしれない。そこへ古川正行が戻ってきた。手に

は二本の鍵が握られていた。部屋まで案内するという古川正行の申し出を丁寧に

辞退し、二人は階段を上った。ロビーに立つ三人に背を向けると、

圭の顔から笑顔が
消えた。
「謝罪の気持ちでいっぱい、という雰囲気じゃなかったな」
「そうですね」
有紀のキャリーバッグを持ち上げ、並んで歩いていると、テラスから声をかけられた。
「あれ、遠藤さんじゃないっすか」
階段を上りきると、学生風の男が一人近づいてきた。長袖のシャツに半ズボン。
かなり明るい茶色に染まった髪の毛。胸元には鮫の歯を模した、白いペンダントが
ぶら下がっている。
「遠藤さんも呼ばれてたんすね。こんなところで会えるなんて嬉しいなあ。一緒に
コーヒーでもどうっすか？」
有紀が気乗りしないという雰囲気で半歩下がった。

「はじめまして。彼女の友人の水野です。せっかくのお誘いなんですが、僕らはこれからバイクに乗りに行く予定なので」

圭が一歩踏み出し、有紀と男との間に体を割り込ませた。

「あ、すんません。俺は中野っていいます」

男はたった今、圭がそこに立っていることに気がついた、という雰囲気で自己紹介をした。笑顔だったが目は笑っておらず、「お前は誘ってないんだよ」という意思をはらんで見えた。

「おい、兄貴！」

食堂からもう一人似たような男が顔を出し、中野に呼びかけた。

「じゃあ、またあとで」

馴れ馴れしく有紀の肩に触れると、中野は食堂へ消えていった。

八月十四日　午後一時　（2）

七つある扉のちょうど真ん中が圭の部屋だった。有紀の部屋はそのひとつ手前。

部屋の広さは八畳ほどだった。セミダブルのベッドが一台と、窓のそばに机と椅子が

置かれている。ユニット式ながらトイレと風呂もついていた。圭がベッドの上に鞄を置く

のとほぼ同時に、ドアが静かに三度ノックされた。扉を開けると有紀が立っていた。

「どうぞ」

有紀に椅子を勧めると、自分はベッドの端に腰掛けた。

「あの、さっきの人たちですけど。事務所で何度か会ったことがあるんです」

眉毛を少し持ち上げ、話の先を促す。

「彼のところに覚せい剤を売りに来ていました」

圭の眉間にシワが寄った。

「その話、警察には？」

「はい、事情を聞かれたときに」

ということは、捜査では何も出なかったか、確証を得られなかったのだろう。一番

まずいのは、有紀がそれを警察に話した、ということが知られていた場合だ。

「いずれにしても注意するに越したことはなさそうですね」

そう言うと圭は立ち上がった。

「さて、と。僕はバイクで島内を回りますが、遠藤さんはどうします？もし一緒に来る

なら、その格好だとマズイんですが」

十分後、着替えた有紀と一緒にホールへ下りた。今はジーンズにスニーカーという

ラフな格好になっていた。古川正行にバイクの鍵を貸してくれるよう頼んでいるところ

に、後ろから声をかけられた。

「バイクに乗るんですか？いいですね」

振り返ると一人の中年男性が立っていた。体には贅肉がついてきていて、ベルトの

上にどーんと腹の肉が乗ってしまっている。頭はやや薄くなりかけていた。

「柏木刑事？」

「お二人は確か事件のときの」

立っていたのは柏木達也という刑事だった。一年前の事件を担当していた刑事で、

何度か事情を聞かれた。名前が思い出せない様子の柏木達也に自分の名前を告げ、

有紀を紹介した。

「そうでした。すみません。どうも名前を覚えるのは苦手で」

柏木達也は頭を掻いた。

「ところであなたがたがどうしてここに？」

「ここのオーナーに招待されまして。さっき着いたばかりです」

「それじゃあ私と同じですね。私も招待されて、昨日到着したんです。のこのことね。

刑事の薄給じゃあ、こんなところ滅多に来られませんから」

柏木達也は自虐的に笑うと、古川正行にバイクが何台あるのか尋ねた。

「バイクは全部で二台あります。ヤマハマジェスティとドゥカティモンスターが一台ずつ」

イタリア車のモンスターは魅力的だが、二人乗りには不向きである。マジェスティを選ぼうとしたところで、先に柏木達也が口を開いた。

「悪いんですけど、私の免許オートマ限定なんです。マジェスティの方に乗せてもらって良いですか？」

オートマしか乗れないのなら仕方がない。圭はドゥカティの鍵を取った。

「先に車庫へ行っていてください。私は部屋に戻って免許を取ってきます。こんな離島で取り締まりは無いと思いますが、警官が免許証不携帯じゃ締まらないですからね」

自分で言って笑いながら、柏木達也はどたどたと階段を上っていった。

「では、ご案内は私が」

いつの間にか二人の後ろに女性が一人立っていた。

「私、社長の秘書をしております。松田玲子と申します」

ブラウスにタイトスカートという、いかにも秘書という格好をした女性は、そう言って頭

を下げた。長めの髪の毛を後ろで留めている。顔を上げると、細いメタルフレームの

眼鏡がキラリと光った。

「こちらへどうぞ」

二人を先導する形で歩きながら、松田玲子が言った。

「このような場にお呼びしてしまって申し訳ありません。社長にはお止めになるよう

進言したのですが」

「あなたが謝るようなことじゃありません」

有紀がそう言うと、松田玲子はほっとしたように微笑んだ。

玄関を抜け、外に出ると日差しが眩しかった。風はあるが強くはない。正面扉のすぐ

脇、スロープを降りたところに、半地下の車庫があった。松田玲子が白い取っ手を引く
と、ガラガラという音を立てて引き戸が開いた。
「建物の中からガレージへは行けないんですか？」
扉を開けるのを手伝いながら圭が尋ねた。
「行けないことはないのですが、厨房からしか下りられません。食材の保存に使う
こともあるので。ただお客様を通すような場所ではありませんから、事実上外から
しか」
顔にかかった前髪を耳にかけながら松田玲子が答えた。
広いスペースにバイクが二台並んで停められていた。二台ともぴかぴかに磨き上げ
られていた。
「島の道路は広いので、バイクで走るのに向いています。アメリカの広い道路に慣れ
た水野さんには窮屈かもしれませんが」
曖昧に笑いながら、圭はガレージの中を見渡した。壁に沿って棚

が設えられており、
工具や普段使わない道具類が、整頓されて収められている。古川正行は几帳面な
性格をしているのだろう。
「お待たせしました」
そこへ柏木達也が入ってきた。松田玲子からヘルメットを受け取ると、それを被りマ
ジェスティに跨った。エンジンをスタートさせ、外へ出て行く。行き場を失った排気ガス
に、三人が顔をしかめた。圭は有紀にフルフェイスのヘルメットを被せると、ドゥカティを
押して車庫を出た。
「タンデムの経験は？」
有紀は首をふるふると横に振る。
「コツがいくつかあります。一つは怖がらないこと。走っていればバイクは簡単には
倒れませんから。二つ目は走行中は腰に手を回して、なるべくぴったり体を寄せるこ

と。その方が体重移動が楽になります」

そう言うと自らもヘルメットを被った。リラックスリラックスと繰り返し、ヘルメットの

後ろをぽーんと叩くと、圭はバイクに跨った。車体をしっかりと支え、有紀に後ろへ乗る

よう指示する。有紀は恐る恐るバイクに跨ると、圭の腰に手を回し、体を密着させた。

キーを回してエンジンをスタートさせる。エンジンが唸り、車体が震える。発車しようと

したところに、松田玲子が話しかけてきた。

「もし海岸に下りるなら島の北側がいいですよ。南側は漂着したゴミで、あまり綺麗

とは言えませんので」

圭は左手を上げてそれに答えると、親指を立て、柏木達也にジェスチャーで先に行く

よう伝えた。

八月十四日　午後一時　（3）

二人の体、それに車体がひとつとなり、景色が後ろへ飛び去っていった。初めて

バイクに乗る有紀に配慮し、カーブを曲がる際には速度をかなり落としたが、それでも

柏木に置いていかれるようなことにはならなかった。見た目同様、バイクはよく手入れ

されていた。カーブを抜け、圭がスロットルを上げれば、黄色い怪物はあっという間に

加速した。

二台のバイクは島の南側に差し掛かっていた。海岸に下りられそうな場所を見つけ

ると、圭がクラクションを鳴らし、路肩にバイクを停めた。それを見て、少し先で柏木達

也も停車した。

人生初のバイクに興奮気味の有紀を先に降ろし、自らもバイクから降りると、スタン

ドを立てる。そこへ柏木達也がバイクをユーターンさせて戻ってきた。

「少し海岸を見ていきましょう」

ヘルメットを取った柏木達也の顔には、怪訝そうな表情が浮かんでいた。

「確か見るなら島の北側って言ってませんでしたっけ？」

それを聞いて圭が微笑んだ。

「一応見ておきたいんですよ。見るな、と言われれば見たくなるのがヒトの性って奴でしょう？」

島をぐるりと囲うように作られた道路は、そのすべてが海岸に沿っているわけではなかった。島の南側ではやや内陸部に作られており、海との間には木々が茂っている。

ざくざくと草むらを分けていくと、海が見えてきた。到着したときに見た海と違い、岩がごろごろした海岸だった。砂浜と磯を足して二で割ったような海岸だ。松田玲子の言ったとおり、無数のゴミが流れ着いていた。圭がその中のひとつを摘み上げた。洗剤の

容器と思われるそれには、ハングルで書かれたラベルが貼られていた。

「韓国から流れて来ているんですね」

手元を覗き込んで、残念そうに有紀が言った。

「確かに、お世辞にも綺麗とは言えないな」

柏木達也が「だから言ったのに」というように苦笑いを浮かべながら言った。だが圭の目線は彼を通り越して、さらにその後ろを見ていた。とびきり大きなその漂着物は、小ぶりの船だった。船体がボロボロではあったが、船外機も付いている。舳先を陸の方に向けて引っかかっていた。船体にはハングルで名前が書いてある。タンクを確認すると、三分の一ほど燃料が残っていた。圭が船外機をスタートさせると、半分海水に浸かったプロペラがくるくると回転した。

「どうしたんですか？」

船をためつすがめつしている圭を見て、有紀が尋ねた。

「いえ、まだ動くみたいですし、ちょっと珍しい漂着物だと思って」

圭は舷牆に手をかけると、それを飛び越えるようにして船から降りた。

「大方先日の台風で流れ着いたんでしょう。かなり勢力が大きい台風でしたから。

さあ、もういいでしょう？」

言うが早いか、柏木達也は踵を返し、バイクを停めた場所に向けて歩き始めた。

その後ろを追いながらも、圭はきょろきょろと周りを見回していた。

再びバイクに跨った三人は、そのまま島をぐるりと回った。島の北側では道路は砂

浜に沿って敷かれていた。圭は別荘を出た直後より、バイクを操縦しやすくなっている

と感じていた。有紀は持ち前の飲み込みの速さを発揮し、タンデムのコツを掴んでき

ていたのだ。カーブでは自然に重心を傾ける。そこで圭は直線に入るとスロットルを

上げ、一気に柏木達也を追い抜いた。有紀の腕に力が入った。くすぐったさに圭が

笑いをこぼしたが、ヘルメットの奥にある有紀の耳には届かなかった。

三人はトラックの中から見かけた湾でバイクを停めた。圭は両手にスニーカーをぶら

下げると、ジーンズの裾を折って波打ち際を歩いた。時折寄せた波が足をくすぐった。

同じように裸足になった有紀がその後ろを追う。有紀はスニーカーを砂浜に置いてき

ていた。柏木達也は木陰に座り、海を眺めていた。

圭がくるりと体の向きを変えた。口元に笑みをたたえると、大きく海水を蹴り上げる。

有紀が両腕を顔の前で合わせ、それを避けた。頭上から降り注ぐ海水が治まると、

有紀は両手で海水をすくい、圭に向けて放った。身をよじって避けようという、圭の試

みは失敗に終わり、シャツの肩部分を大きく濡らした。圭もスニーカーを砂浜へと放り

投げると、海水をすくい上げて応戦した。

砂浜には大小さまざまな貝殻が落ちていた。先ほどの海岸と違い、

ここにはゴミが
ほとんどない。何気なく小さな巻貝を拾い上げると、掌に乗せられた貝殻からヤドカリ
の小さな体が覗いた。波打ち際には赤や黄色の熱帯魚が群れを成して泳ぎまわり、
二人が足を踏み出すと、それを避けるように散っては、また群れを作るのだった。
ひとしきり遊んでから、二人は砂浜に腰を下ろした。伸びをひとつして、圭が仰向け
に寝転がった。
「どうしたんですか？」
遠い目をしている圭を見て、有紀が訪ねた。
「ガレージで松田さんが言ったこと覚えてます？」
特に思い当たる節がないようで、有紀が首を傾げた。
「あの人『アメリカの広い道路に慣れた水野さんには』って言いました。僕がアメリカ
にいた話なんて一度もしていないにもかかわらずです」
「それって…」

「調べたのは住所だけじゃないってことでしょうね」

そこまで言うと圭は起き上がって、乾いた足に靴を履き直した。それを見て有紀もスニーカーを履く。

「あれ」

立ち上がった有紀が驚いた声を上げた。

「指輪が」

有紀の中指から指輪が消えていた。圭が探しましょう、と言うと有紀がそれを制した。

「どうせ安物ですから」

それでも圭が砂浜を探したが、結局指輪は見つからなかった。

二人が柏木達也のところへ戻ると、彼はいびきをかいていた。圭がその肩を揺すった。

「んがっ」

短いいびきをひとつかいて柏木達也が目を覚ました。

「置いていきますよ」

ゆっくりと体を起こす柏木達也の背中に向かって圭が言葉をかけた。

八月十四日　午後一時　（3）

部屋に戻り、開け放った窓の前に立つと、強い日差しがじりじりと肌を焼いた。

傾き始めた太陽が、無遠慮に陽光を差し込む。日向の匂いが圭を包み込んでいた。

西向きに設えられた窓からは、広がる海が一望できた。空は夜の気配を漂わせ、

鈍い水色が広がり始めていた。夜から逃げるように沈みかけた太陽に照らされ、

海面近くの空は眩いばかりのオレンジ色をしている。圭と海との間に挟まれた

景色は、逆光線で黒く影に包まれていた。

部屋のドアが三度ノックされた。木の扉にあたるコツコツという音は、有紀の

白く小さな手を連想させた。顔を窓の外に向けたまま、

「開いてますよ」

と声をかけた。振り返ると、扉の隙間から有紀の顔が覗いていた。圭が見てい

た木々と同じように、有紀から見れば圭も真っ黒なシルエットに見えただろう。

「六時から夕食らしいですよ」

室内履きのスリッパを脱ぎ、ハイカットのスニーカーに足を突っ込む。砂の

付いたジーンズは、既に黒のスラックスに履き替えていた。靴紐を絞めると、

机の上にある鍵を手に部屋を出た。

食堂に向かって歩いていると、階段を上がってくる松田玲子と鉢合わせた。

「ちょうど呼びに行こうとしていたところなんです。皆さんもうお集まりに

なっています」

松田玲子の顔色が優れなかった。心配事がある、と顔に書いてある。直接尋ねる

までもなく、その内容は明らかになった。彼女に続いて食堂に入ると、一人の男が

席を立った。その男がテーブルの向こうを回り、二人の方に近づいてきた。その顔

を見て、隣で有紀の体がこわばるのを感じた。有紀が圭のシャツ、その肘の辺りを
ぎゅっと掴んだ。
「その節は大変ご迷惑をおかけしました」
そう言って神妙に頭を下げたのは、工藤信也だった。
「執行猶予がつきまして、今はこっちで暮らしています。都会と違って誘惑も
少ないので」
その表情には穏やかな笑みさえ浮かんでいた。
松田玲子に案内されて席に着いた。古川正行が二人のグラスにシャンパンを
注ぐ。それを見届けた信太郎が立ち上がり、集まった人たちを紹介した。
「ご存知の方もいらっしゃると思いますが、妻の奈緒子と息子の信也です。
その隣は信也の友人の中野勇太君と、弟さんの健太君」
紹介を受け、兄弟がヘラヘラと笑った。
「妻の横に座っている三人は、中国からうちの会社に勉強に来て

いる学生です。
まあ、たまには息抜きも必要だろうということで、今回連れてきております。
料理を運んでいるのは、この別荘の管理人をお願いしている古川正行君と、
その妻の夏実さん。えー、最後に東京で息子がお世話になった方々です」
話が三人に及ぶと、信太郎がやや言葉に詰まった。柏木達也が立ち上がり、
名前と職業を告げた。刑事と聞いても、特に表情を変える者はいなかった。
続いて圭と有紀が簡単に自己紹介をした。松田玲子を含んだ数人が、軽く
頭を下げて会釈をした。それでは、と信太郎がシャンパングラスを掲げた。
「では、みなさんとの出会いを祝して」
乾杯の音頭が取られ、テーブルのそこかしこでグラス同士が合わさる音が
響いた。

食事はフランス料理のフルコースだった。オードブルに始まり、スープ、

ポアソンと続く。

このような場にお呼びしてしまって。

脳内で松田玲子の言葉が繰り返された。表情が優れなかったのはこのため

だったのだ。圭はテーブルを挟んで向かいに座る、工藤信也を改めて観察した。

長かった髪は短く刈り込まれ、肌も健康的に焼けていた。そのおかげか以前漂っ

ていた軽そうな雰囲気は見られない。信也は隣に座る男と楽しげに話していた。

あの中野という男と、食堂から顔を出した弟だ。確か中島勇太と健太といったか。

兄弟というだけあって、二人ともよく似ていた。

食事はフルーツとコーヒーで締めくくられた。食事を終え、程よくアルコール

の入った面々が娯楽室へと移って行った。二人の方にチラッと目をやりながら、

最後尾で松田玲子が出て行った。

「大丈夫ですか？」

表情なくデミタスカップを見つめる有紀に問いかけた。

「大丈夫。少し驚いただけです。まさかあの人に会うとは思っていなかったから」

圭が相槌を打った。

「どう思います？」

言いたくはないのですが、というように僅かに間を空けて圭が答えた。

「人間そう簡単に変われるものじゃありません。付き合っている友人も変わっていないようですし、中身はそのままと考えた方がいいでしょうね。反省はしているかもしれないですが」

圭が軽く肩をすくめた。

「ますます僕らを呼んだ理由がわからなくなりました」

二人の間に沈黙が流れた。そこへ完全に一杯機嫌の柏木達也が入ってきた。

「ああ、ここにいましたか。ここの娯楽室すごいですよ。遊び道具があらかた揃ってます」

そう言うと屈みこむように二人の耳元に近づき、声を落として続けた。

「あのオーナー、並みの金持ちじゃありませんな」

圭が適当に相槌を打つと、柏木達也は姿勢を戻し、キューでボールを打つ真似をした。

「そういえばビリヤードの相手がいなくてね。どうですか？ひと勝負」

僕らは部屋に戻ります、と言いかける圭に先んじて有紀が立ち上がった。

「私たちも行こうと思っていたところなんです」

そう言うと圭の手を取って食堂を出て行った。

「こうなったらとことん付き合ってあげましょう。どうして私たちを呼んだのか、じっくり見せてもらいます」

八月十四日　午後一時　（４）

娯楽室の中では銘銘が遊びに興じていた。工藤奈緒子は松田玲子を相手に
チェスで勝負。信也は友人とともにダーツを放っていた。奥に設置された
バーではカウンターの向こうに古川正行が入り、信太郎は酒を飲みながら
留学生に熱弁を振るっていた。今は誰も座っていないが、ポーカーや麻雀用の
テーブル、果てはカラオケまであった。

「なにか飲み物を持ってきましょうか」

三人が入ってきたのを見て、古川正行が尋ねた。柏木達也がスコッチを頼み、
圭もそれに便乗した。

「果実酒も用意してありますよ」

という言葉を受け、有紀にはシードルが配られた。それを手に、有紀は
ビリヤードテーブルのすぐ脇に腰を下ろした。

圭はスタンドからキューを一本抜くと、歪みがないことを確かめ、重心の
位置を測った。柏木達也が九つのボールを並べ、そっと木枠を外すと手玉を
圭に差し出した。キューにチョークを塗っていた圭は、それをテーブルの隅
に置き、手玉を受け取った。
「お手柔らかにお願いしますよ」
柏木達也の軽口を背中で受け流し、圭はしなやかな指でブリッジを組むと、
流れるような動きで手玉を突いた。勢いよく弾き出された手玉は、三角形に
並べられた的玉をバラバラに飛ばした。
「参ったな。敵わないや」
勝負は何度繰り返しても圭の勝ちだった。柏木がスコッチのお代わりを
取りに行った。圭は有紀の隣に腰を下ろした。
「何でもできるんですね」

手元を見つめたまま有紀が言う。有紀はどこからかチップを探してきて、

パームの練習をしていた。チップが大きいせいか、上手くホールドできずにいた。

「何でも、ってわけじゃありません。ビリヤードだって特別上手くはないですし。

あれだけ酔っていれば、手玉が一つに見えているかどうかも怪しいものですよ」

そう言うと有紀の手を取り、チップの位置を少しずらした。チップはぴたりと

掌に収まり、逆さにしても落ちてはこなかった。

「水野さん、今度はポーカーで勝負しませんか？」

気が付くとポーカーテーブルにはオーナー夫婦と柏木達也が座っていた。

一人だけ立っているところを見ると、松田玲子がディーラー役を務めるらしい。

「どうぞ、打ち負かしてきてください。私は一足先に部屋に戻りますから」

有紀は笑顔で立ち上がり、おやすみなさいと言い残して部屋に戻

っていった。
圭もそろそろ部屋に戻りたかったが、待ちきれずに近づいてきた柏木達也に肩を
組まれてしまった。
「勝ち逃げは許しませんよ」
そう言って柏木達也は酒臭い息を吐いた。テーブルに着くと、松田玲子が
カードを配った。
「ビット」
左端に座っていた信太郎がチップを二枚放った。それを見て全員がチップを
二枚ずつ前に押しやった。圭は二枚のカードを交換する。自分の手札から三枚の
カードを抜きながら、柏木達也が話しかけてきた。
「遠藤さんでしたっけ、一緒に来た方。彼女なんですか？」
「いいえ、そういうわけではありません」
自分の手札を見た柏木達也の眉間にシワが寄った。それは一瞬で消えたが、

圭はそれを見逃さなかった。

松田玲子が両手を軽く広げ、二度目のビットを促した。

「ビット」

二枚のチップを放ったのは柏木達也だった。オーナー夫婦と松田玲子は勝負を

降りた。

「じゃあ、コールで」

圭が二枚のチップを支払い、勝負は圭と柏木達也の一騎打ちとなった。圭の

手札はスリーカード、柏木達也はワンペアだった。チップが圭の元に集められた。

柏木達也が苦々しげに呻いた。松田玲子によってカードが配られ、再び信太郎が

ビットを行った。続いて全員がチップを支払った。圭はすべてのカードを交換した。

「それにしても綺麗な方ですねえ」

どうやら柏木達也はさっきの話の続きをしているようだった。

「ええ、その点は否定しません。僕はドロップです」

勝負を降り、圭がカードを机の上に伏せた。

「昼間のはナイスアシストだったでしょう？」

ニヤニヤと笑いながら、柏木達也がチップをビットした。圭が黙っていると、

勝手に続けた。

「タンデムですよ。私がマジェスティに乗ったから、ぴったりくっつけたでしょう？」

相変わらず下品に笑い続ける柏木達也から目を逸らし、グラスに口をつけた。

「じゃあマニュアルを運転できない、って言うのは嘘ですか？」

「いえ、それは本当なんですけどね」

それじゃあアシストでもなんでもない。喉まで出かけた言葉をスコッチで飲み込む

横で、チップは松田玲子の元に集められた。ふとバーカウンターに目をやると、

留学生が座っているのが目に入った。三人で頭を突き合わせ、なにやらひそひそ

と話し込んでいる。その内の一人と圭の目が合った。圭は愛想笑いを浮かべたが、

彼は無表情で目を逸らすと、指をさして圭が見ていることを他の二人に伝えた。

残りの二人も振り返って圭を見ると、連れ立って娯楽室を出て行った。

結局柏木達也は一度も勝つことなく、あっという間にチップを全て失った。

娯楽室にはすでに信也たちの姿はなかった。オーナー夫婦も部屋に戻り、

飲みすぎた柏木達也は古川正行に抱えられて出て行った。

「お強いんですね」

テーブルの上を片付けながら、松田玲子が言った。圭は否定するように、ゆっくりと

首を振った。

「少し勘が良いだけです。引き際を見極めれば、大きく負けが込んだりはしません」

「勘でビリヤードは勝てませんよ」

カードを箱に戻しながら、松田玲子が笑った。

松田玲子と共に娯楽室をあとにし、圭は食堂に寄って水を一杯飲んだ。タンブラーを
流し台に置き、照明を消して食堂を出ると、別荘内は闇に包まれた。
数秒目を閉じて
暗闇に目を慣らす。雲の切れ間から月が顔を覗かせ、足元を薄っすらと照らした。
扉の前で鍵を探していると、隣の部屋のドアが開き、有紀が顔を出した。

「足音が聞こえたので」

そう言う有紀はまだワンピースを着ていた。

「なんだか寝付けないんですけど、良かったら散歩に行きませんか？」

圭は鍵を探すのをやめ、二人は並んで外へ出た。空を見上げると、雲がかなりの
速さで流れていった。今晩は三日月だった。二人をぬるい風が撫でた。台風特有の
湿った風だ。

海岸へと延びる坂を下りながら、有紀が尋ねる。

「ポーカーはどうでした？」

「まあ、ぼちぼちですかね」

前を向いたまま圭が答えると、隣で有紀がくすっと笑った。

「水野さんはきっと、ビンの蓋を開けるのにも『楽勝だった』とは言わないんでしょうね」

「ビンの蓋は恐ろしく固いかもしれませんよ」

そう言って圭も微笑んだ。

何の前触れもなく、圭が尋ねた。

「月には何人くらいの人が住んでると思います？」

「えっ？」

質問の意味がわからず、有紀が足を止めた。

「昔見た映画に出てきた台詞なんです。月に人が住んでるとして、何人くらいだと思います？」

数歩先で足を止めた圭は、空に浮かぶ三日月を見上げていた。同じように月を

見上げ、有紀が考えこんだ。

「うーん、百万人くらいですかね」

「だったら、三日月のときは大混雑でしょうね」

一瞬言葉の意味を考え、有紀が吹き出した。見上げすぎて凝ったのか、首をぽき

ぽきと鳴らしながら圭も笑った。

八月十五日　午前八時　（1）

翌朝目を覚ますと、外は弱い雨が降っていた。パンツ一枚で頭を乾かしている

と、ドアが静かにノックされる。特徴ある三度のノック。有紀だろう。ジーンズ

を履き、とりあえずドアを開けた。

頭にバスタオルを被り、上半身裸の圭を見て思わず有紀が謝った。

「どうぞ。こんな格好ですけど」

圭はワシワシと頭を拭き、畳んであったTシャツを被った。

「どうしました？」

バスタオルを簡単に畳みながら圭が尋ねた。どこか落ち着かない様子で立って

いた有紀が、思い出したように答えた。

「朝食を食べに行かないかと思って」

五分だけ待ってもらえるよう頼み、簡単に髪を整え、部屋を出た。食堂に入ると、

食べ終えた皿を片付けてしている古川正行がいた。

「すぐに朝食をお持ちします」

パンと目玉焼きという、オーソドックスな朝食の乗ったプレートを手に戻って

きた古川は、コーヒーを注ぎながら、残念な知らせがあると言った。

「今朝早く九州に上陸した台風がコースを変えました。このまま行くと、今夜あたり

この島を直撃しそうです」

「それでは皆さん屋内に篭られているんですね」

窓の外を見ながら有紀が呟くと、古川正行がそれを否定した。

「皆さん既に食事を済ませて、出かけて行きました」

「台風が来るのにですか？」

「波が高くなると楽しめるものもあるんですよ。信也さんは友達とサーフィンに。

オーナーは留学生を連れて釣りに行きました。台風が来る前は魚が良く釣れるん

です」

有紀は古川正行からコーヒーの入ったマグカップを受け取った。

「なので今居るのは、私ら夫婦の他は奈緒子さんとあなた方だけですね」

厨房に戻ろうとした古川正行が、思い出したように付け加えた。

「そういえば柏木さんがまだでした。もっとも昨日はずいぶん飲んでいたようですから、しばらく起きてはこないかもしれませんけど」

食事を終えると、二人は娯楽室に移った。雨の中出かけるのを避け、ビリヤードをすることにしたのだ。キューの握り方やブリッジなど、基本的な部分から始めた。

マンツーマンでの指導の結果、昼食の頃にはなかなか様になってきた。仮に素面だったとしても、柏木達也とならいい勝負になる、そう言うと有紀は満足そうに笑った。

昼食を済ませた後、圭は自分の部屋に戻っていた。朝から降り続く雨が強くなり、風が窓を揺らしていた。

圭は食堂に下りると、厨房にいる古川正行に声を掛けた。

「バイクの鍵を貸して欲しいんですけど」

古川正行は洗い物をしていた手を止めて顔を上げた。

「この天気の中、バイクで出かけるんですか？」

「昨日、ビーチに落し物をしてきたみたいで。天気がこれ以上酷くなる前に探しに行きたくて」

古川正行はエプロンで手を拭きながら厨房から出てきた。

「少し待っていてください」

部屋から戻ってきた古川正行は、鍵と一緒にレインウェアも持ってきていた。

「雨がかなり強いですから、これを着ていったほうがいいかと思いまして」

礼を言って受け取ると、圭は雨の中を出て行った。

二時間ほど経って圭が別荘に戻ると、レインウェアに身を包んだ古川正行と

鉢合わせた。

ロビーには信也と中島健太も立っていた。二人は入ってきた圭を一瞥したが、何も

言わずに視線を戻しただけだった。

「どこか行くんですか？外は酷い天気ですよ」

ぼたぼたと水を垂らしながら圭が尋ねると、古川正行が困ったような顔をして

答えた。

「勇太さんが一人でサーフィンに行ったきり戻らないのです。携帯に連絡しても

出ませんし。これ以上天気が悪くなる前に探しに行こうかと。おそらく携帯は車に置い

たまま、サーフィンをしているんじゃないかと思うのですが」

ロビーに居た二人も行くのかと尋ねると、古川正行は否定した。

「勇太さんがトラックで出かけたので、今残っているのはバイクだけ。あの二人は

バイクの免許を持っていないので」

やれやれ、といった様子で古川正行が首を振った。外では強風にあおられて木々が

揺れていた。空も海もすっかり色を失い、灰色と化している。台風が間近に迫ってきて

いた。

「僕も手伝います。二人で探せば時間も半分で済みますよ」

「ありがとうございます」

中島勇太や信也ではなく、古川正行が礼を言った。

「ただガソリンが少し減ってきているんです。出る前に給油しておいた方がいい。

お二人も手伝ってもらえますか？」

四人は連れ立って外へ出て行った。

給油を終え、四人がロビーへ戻ってきた。

「なにかあったんですか？」

そこへ有紀が階段を下りてきた。毛先から雫がたれていた。圭が指摘すると、

彼女は指先で軽く毛先を搾った。

「さっきシャワーを浴びたので。タオルで拭いたんですけど」

「ちょうど良かった。遠藤さんを探していたんです」

圭が事情を説明し、有紀にいつでも連絡を受けられるようにして

くれるよう
頼んだ。

八月十五日　午前八時　（2）

「あ、古川さん。僕の携帯番号教えておきます。お互いに連絡取れたほうが、なにかと便利でしょうから」

横殴りの雨の中、二人はエンジンをスタートさせた。間もなくT字路に差し掛かり、並んで走っていたバイクが停まった。圭がヘルメットのシールド部分をぬぐいながら、左側を指差す。彼に向かって親指を立てると、古川正行は右へと進路をとった。古川正行は島の北側から、圭は南側からぐるりと島を回る予定だった。どこかに車を停めてサーフィンをしていれば、どちらかが見つけられるはずだった。仮に見逃したとしても、一本しか道路のないこの島では、二人はどこかでぶつかる。そうなればそこで次のプランを練ればいい。

黄色い車体の表面を、水が滝のように流れていった。水滴がシールドに付着し、

視界を狭めた。人を探すには最悪のコンディションである。空を厚い雲が覆い、
まだ日が高い時間帯にもかかわらず、あたりは薄暗かった。うねり、濁る海は
荒れていた。いくらサーフィンが波に乗るスポーツとはいえ、この海に漕ぎ出
すのは自殺行為に思えた。降りしきる雨はむき出しの両手をぬらし、気化して熱
を奪っていく。路面も濡れて滑りやすくなっていた。圭はある程度、速度を落とし
て走ることを余儀なくされた。

走り出して二十分ほどで、路肩に青のピックアップトラックが停められてい
るのを見つけた。予想外にあっさりと見つかったことで、圭はほっと胸を撫で下ろ
した。正直この天気の中を、これ以上走り回るのは気が進まなかった。見れば
トラックの荷台にはサーフボードも積まれていた。圭がその脇にバイクを止め、

運転席へと近づいた。ぼやけた視界の中、運転席に人が座っているのが見えた。

こぶしで軽く窓を叩くが、反応がない。

眠っているのか？

水滴の付いて見えにくくなったシールド部分を持ち上げた。強い風に吹かれた

雨が顔を叩く。腕で窓の表面を拭った。顔を近づけて中を覗き込んだ圭の動きが

止まった。

運転席では勇太が胸の中心にナイフを突き立てられていた。

ドアレバーを引くが、ロックされていて開かない。

なにか使えるものはないか？

大きな石でもあれば、窓ガラスを割ってドアを開けられる。周りを見渡すが、

落ちているのは小石ばかり。それに漂着したゴミがあるだけだった。

ここは昨日見た

海岸ほど酷くはないが、いろいろなものが流れ着いていた。圭は少し離れた場所で

ひらひらと飛んでいたビニール袋を捕まえた。そして足元の小石をその中に拾い集め

ると、助手席側に回り、フレイルの要領で叩きつけた。

鈍い音がしてヒビが入る。

もう一度袋を振りかぶり、頭の上で一回転させると、十字に入ったヒビをめがけて

振り下ろした。弾けるような音とともに、窓ガラスが割れた。袋が裂け、中に詰め

ていた小石が零れ落ちた。残ったガラスを肘で落とし、ロックを解除した。助手席側

から車内に入り、脈を取ったが、勇太は既に冷たくなっていた。

車から降りた圭は、まず古川正行に電話をかけた。自分が今いる場所を大まかに

伝え、中島勇太を見つけたこと、そして今すぐ柏木達也を連れてきて欲しいと言った。

詳しい事情は別荘に戻って聞いて欲しいと言って電話を切った。次に有紀の携帯を

呼び出した。じっと電話の前で待っていたのだろう、一度目のコールのあと有紀が

出た。

「勇太さんの遺体を見つけました」

電話の向こうで有紀が息を呑むのを感じた。

「じきに古川さんが柏木さんを迎えに戻ります。すぐに出られるよう、柏木さんを起こしておいてください」

有紀の消え入るような返事を聞いて、電話を切った。

柏木達也を連れて古川正行が到着した頃、圭の濡れようはさらに酷くなっていた。

気温は低くなかったが、濡れたせいで体温が奪われ、体の芯から震えがきた。

柏木達也が青白い顔をしているのは、遺体が見つかったからか、それもと二日酔いのせいか。青白い顔を流れる雨だれが、その表情を尚一層悲惨に見せていた。柏木達也はポケットから、ラテックス製の薄い手袋を取り出すと両手にはめた。

古川正行がポケットからもう一組手袋を取り出して、それを圭に手渡した。

「掃除用に、買ってあったものを、持ってきました。役に、立つかと、思って」

圭もそれに手を突っ込んだが、濡れていて滑りが悪いのと、かじかんで上手く

動かないせいで、なかなかはめられなかった。

柏木達也が中島勇太の首筋に指を当て、脈を取ったが、すぐに諦めたように

離れた。

トラックの周りをぐるりと回り、バイクのそばに立っていた圭の元へ歩み寄った。

「見つけたときは、もう、この状態、だったんですか？」

轟々と風が唸るせいで、会話は大声で叫ぶようになる。柏木達也の息はまだ

酒臭かった。

「助手席のドアは閉まっていて、鍵も、掛かっていました。僕が窓を割って、ドアを、

開けたんです」

「車の、周りに、足跡は？」

「たぶん、なかったと、思います」

柏木達也は改めて周りを見たが、たった今自分がつけた足跡しか残っていな

かった。トラックのタイヤ痕はもとより、圭の足跡も、乗ってきたバイクのタイヤ

痕も残っていない。強い雨がすべてを洗い流してしまっていた。

「遺体を、このままには、しておけません」

圭は柏木達也と一緒に、中島勇太の遺体を助手席へずらした。柏木達也がトラック

を運転し、二人がバイクで戻ることができれば一度で済んだが、アルコールが残る

柏木達也に運転は無理だった。やむを得ずドゥカティを置いて、いったん別荘に戻る

ことにした。圭が運転席に乗り込み、刺さったままになっていたキーを回して、

エンジンはスタートさせる。古川正行が運転するマジェスティがトラックを先導する形

になり、二台は別荘へと戻った。

トラックを車庫に収めると、古川正行の後ろに乗って着たばかりの道を戻った。

雨ざらしになっていたドゥカティに跨り、別荘へ戻る。二人がバイクを停めて玄関の扉

を開けると、心配そうな顔をした有紀が迎えてくれた。鼻をすすり、手渡されたタオル

で頭を拭いた。体が冷えたせいで、水のような鼻水がぐずぐずと垂れた。

「シャワーを浴びて、着替えてきてください。風邪をひいたら困ります」

一足先に戻った柏木達也は、すでにシャワーを浴びているという。着替えを済ませ

てから、食堂で説明をするというので、圭も部屋に戻った。

熱いシャワーが冷え切った体の上で弾けた。熱いお湯がかかると、手足の指先が

痛んだ。こんなときは熱いお湯に浸かりたかったが、流石に湯船にお湯を張る時間は

ないように思われた。髪の毛と体も洗い、泡を流しているとドアの外から声を掛けら

れた。

「勝手に入ってすみません。新しいタオルを持ってきたんですが」
有紀がタオルを持ってきてくれたのだった。シャワーカーテンが引かれているから、
ドアを開けても圭は見えない。
「ありがとうございます。ドアを開けても大丈夫ですよ」
カーテンの向こうでドアが開く音が聞こえた。壁とカーテンの隙間からタオルを渡す
と、有紀は逃げるように出て行った。
新しいタオルで水分を拭い、シャツに袖を通した。無造作に脱ぎ捨てた服が、
丁寧に干されていた。黒のスラックスにスリッパ履きという、ちぐはぐな格好で
外に出ると、ドアの外には有紀が立っていた。
「すみません。ずいぶん迷ったんですが、勝手ついでかと思いまして」
圭が服を干してくれたことにお礼を言うと、有紀は逆に謝った。
「あの、大丈夫ですか？」

圭は黙って頷いた。

八月十五日　午後五時　（1）

食堂では柏木達也を除く全員がテーブルに着いていた。入ってきた二人の方に、全員の視線が集まった。圭と有紀を確認すると、がっかりしたように顔を戻した。

どうやら柏木達也が入ってきたものと勘違いしたらしい。圭が並んで空いていた席に着くと、古川夏美が二人分のコーヒーを持ってきた。湯気の上がるコーヒーが、温まりきっていない体に沁みた。

「柏木さんは車庫に行っています。すぐに戻ると言っていましたが」

ほどなくして神妙な顔をした柏木達也がデジカメを手に戻ってきた。裾が少し濡れていた。

「いくつかお尋ねしたいことがあるんですが」

入ってくるなり、まっすぐに圭のところへ来た柏木達也が尋ねた。

「車内のどこを触ったか教えてもらえますか？」

「助手席の鍵と、脈を取るために遺体の首に触れました。運転している間も
最低限運転に必要な箇所しか触れていません」
「そうですか」
柏木達也はなにかをメモに書き込んだ。そして全員が集まっていることを
確認すると、自分は席に着かず、テーブルの脇に立った。
「皆さんに伝えなくてはならないことがあります」
全員の顔がまっすぐに柏木達也を向いていた。
「中島勇太さんが亡くなりました。胸にナイフが刺さって亡くなっているの
が発見されました」
圭と古川正行を除く全員がどよめいた。真っ先に口を開いたのは、弟の
中島健太だった。
「じゃあ兄貴は誰かに殺されたってことですか？」
「いえ、発見されたとき扉はロックされていたそうですし、キー

も車内に
ありました。自殺の可能性もあります」
仕事柄こういった状況にも慣れているのだろう。柏木達也は落ち着いて
中島健太をなだめた。
「兄貴は自殺なんかしない！」
中島健太が弾かれたように立ち上がった。
「第一、されていたそう、ってなんだよ。あんたが見たわけじゃないのか？」
柏木達也がちらちらと目線を圭にやる。
「私が到着したのは、水野さんが助手席のドアが破ったあとでしたから」
「だったら！」
圭に噛み付きそうな中島健太の腕を、隣に座っていた信也が掴んだ。その
手を振り払い、中島健太はどっかりと椅子に腰を下ろした。その拍子にコーヒー
カップが乾いた音を立てた。だか、みなまで言わずとも、中島健太

の言いたい
内容はほとんど全員に伝わったようだった。圭に視線が集まる。日本語の不自由な
留学生たちだけが、いまひとつ事情が飲み込めない、という様子で座っていた。
「つまりあなたが言いたいのはこういうことですね」
圭が自ら口を開いた。
「私が勇太さんを殺した。トラックの鍵はもともと開いていて、あたかも閉まっていたかのように、僕がそれを偽装した、と」
座り直した中島健太は言葉を発しなかったが、目がその通りだと訴えていた。
「確かにそれは可能だと思います。ですがよく思い出してください。僕は昨日
初めてあなた方と顔を合わせたんです。勇太さんを殺す動機がない。それに僕が
見つけたとき、すでに勇太さんは冷たくなっていました」
「それだって、確認したのはあんた一人だろう」

疑うような目線を投げかけたまま、中島健太が言った。

「いいえ、それは柏木さんも確認しています。確かに僕が確かめてから少し

時間は経っていましたが、十分や二十分そこらで人の体は冷めません」

「自動車のドアの話ですけど」

意外にも横から意見したのは松田玲子だった。

「学生の頃にレンタカーで旅行したときの話なんですが、寒かったので友人が

車を暖めておこうとしたんです。エンジンをかけてヒーターをつけた彼女は、

ドアのロックを下ろした状態で、ドアレバーを引いたままドアを閉めてしまっ

たんです。普段助手席に乗ることが多かった彼女は、そうやってドアをロック

する癖がついていたんですね。車はインキー。レンタカーでスペアキーもありま

せんから、ＪＡＦを呼んで開けてもらわなくてはなりませんでした」

「だからなんだって言うんですか」

興奮している中島健太が、イライラと言った。

「車の密室状態は外から簡単に作れる、ということです」

反論できず、中島健太は黙ってしまった。

「まあ、そういうことです。今の段階では何もわかりません。一応皆さんに今朝

からの行動をお聞きします」

「それは私たちを疑っているということですかな？」

ずっと黙っていた信之助だった。

「いえ、そういうわけでは。形式的なものというか、なんというか」

困った様子の柏木達也に、松田玲子が再び助け舟を出した。

「こんなことになった以上、事情を聞かれるのはやむを得ないのでしょう？

だったらこれでアリバイがはっきりすれば、余計な疑いも晴れるのではないで

しょうか」

「そう！そう、その通りです。ではですね、水野さんから私の部

屋に来て

いただけますか？」

柏木達也が助かったという風に、ほっとした表情を浮かべた。

八月十五日　午後五時　（2）

「もちろん構わないんですが、遺体はまだ車庫に置いたままですか？」

「はあ、そうですが。先ほど県警に連絡したのですが、この天気ではヘリも飛べませんから、風がおさまるまではこちらで保管することになりました」

「だったら車庫に置いたままにはしない方がいい。腐敗が進んでしまいます」

圭が給仕用の盆を持ったまま立っていた古川正行に聞いた。

「古川さん、これだけの人数分食料を保管しているなら、冷蔵庫は相当大きいんでしょう？」

「ええ、冷蔵庫は四畳ほどの広さがありますが」

冷蔵庫の中に遺体を預かって欲しい、という提案に対して、もっとも早く反応したのは工藤奈緒子だった。

「冗談じゃありません！私たちはまだ数日ここで食事をしなくてはならないんです。

死体と一緒に冷蔵庫に入っていたものを食べるなんて！」

これについては圭を除く全員が同じ意見のようだった。有紀ですら複雑な表情を

浮かべていた。それでも圭は説得を試みたが、奈緒子は頑として聞き入れなかった。

「仕方がありませんね。では遺体は私の部屋に運びましょう」

諦めたように圭が言った。

「冷蔵庫には劣りますが、クーラーを全開にすればいくらか役に立つでしょう」

「けれどもう空き部屋はありませんよ。水野さんはどうするんです？」

心配そうにしている古川正行に、圭が笑顔で答えた。

「大丈夫。僕はロビーのソファででも寝ますから」

遺体の運搬を優先し、事情聴取は食事のあと行われることになった。圭の荷物

は有紀の部屋に預かってもらうことになり、遺体を運び込む前に部屋を片付けなく

てはならなかったのだ。階段の途中で柏木達也が追いついた。

「いろいろ助言や手伝いをしてもらってすみませんね」

頭をぽりぽりと掻きながら柏木達也が言った。

さして広げていない荷物はあっという間に片付いた。クーラーを最強にすると、

柏木達也にシーツを持たせて部屋を出た。

外は相変わらず雨が酷く、外に出れば運ぶ二人も遺体もぐしょ濡れになってしまう。それでなくてもいろいろと動かしてしまっているのだ。証拠保全の点からも、

遺体を雨に濡らすのは避けたい、と柏木達也が主張した。そこで遺体を運ぶ間、

全員に自室か娯楽室へ移ってもらった。厨房からガレージに降り、圭の部屋へと

遺体を運ぶには、どうしても食堂を通らなくてはならない。いくらシーツで包んで

いるとはいえ、遺体を持って目の前を通過することは望まないだろう、という

配慮からだった。

有紀を娯楽室に残し、圭は柏木達也と車庫を訪れた。助手席から遺体を下ろすと、
シーツに包んで部屋に運んだ。二人がかりとはいえ、遺体を動かすのは、かなり
の重労働だった。三十分ほどかかって、やっと遺体は床の上に横たえられた。
先ほどシャワーを浴びたばかりだというのに、二人はすっかり汗だくになってい
た。部屋には柏木達也がしっかりと鍵を掛けた。
二人が娯楽室を訪れると、全員が何をするでもなく、ただバラバラに座っていた。
「済みましたよ。食事にしましょうか」
圭に促され、皆ぞろぞろ食堂へと出て行った。圭が最後尾で電気を消し、娯楽
室を出ると有紀が隣に並んだ。有紀は何も言わず、ただ黙って隣を歩いた。
重苦しい空気の中、食事が運ばれてきた。この日のメニューは魚料理。午前中
に信太郎が釣ってきた魚が調理された。食後に事情聴取を控えているため、アル

コールは出されなかった。

八月十五日　午後五時　（3）

食事を済ませたあと、圭は柏木達也の部屋を訪れた。柏木達也はどこかから
椅子を運び入れていた。二人は机を挟んで座った。

「それでは朝からの行動を教えてもらえますか？」

体の前で手を組み合わせたまま、圭が話し始めた。

「今朝は遠藤さんと一緒に朝食を食べました。確か九時過ぎだったと思います。

古川さんの話では、あなたを除けば僕らが最後だったはずです。それから二人で
娯楽室に行き、ビリヤードをしました。昼食を食べるまでは、遠藤さんと一緒に
いました。午後は二時過ぎまで部屋で一人本を読んでいました。残念ながら証明
できる人はいません。それからバイクで海岸に行きました。戻ってきたのは
二時間ほど経ってからです」

「海岸へ行った？あの天気の中ですか？」

柏木達也が怪訝そうな表情を浮かべた。

「三人で立ち寄ったすぐそこの砂浜です。柏木さんは眠っていたから知らないか

もしれませんが、昨日あそこで遊んだときに、遠藤さんが指輪を落としてしまっ

たんです。ざっと探したんですが見つからなくて。遠藤さんは安物だから放って

おいていいと言うんですが、どうにも気になってもう一度探しに行きました。

なんだったら遠藤さんにも確認してみてください」

「それでその指輪は見つかったんですか？」

圭は首を横に振った。

「だめでした。波もかなり押し寄せていましたから、流されたか、埋もれてし

まったのかもしれません」

柏木達也は会話の内容を逐一メモした。

「結局指輪が見つからず、別荘に戻るとロビーで古川さんたちと出くわしました。

聞けば勇太さんを探しにいくと言います。外は本当に酷い天気でしたから、手伝う
ことを申し出ました。バイクのガソリンが減ってきていたので、四人でガソリンを
足し、古川さんと二人で探しに出ました」
「遺体発見時はどんな様子だったんですか？」
「道路が二手に分かれるところで、古川さんとは別れました。僕が南、古川さん
が北です。もし見つからなければ、島をぐるりと回り、また同じところで合流する
予定でした。バイクを南に少し走らせると、路肩にトラックが停車しているのが
見えました。うーん、たぶん十五分か、二十分くらいは走ったと思います。
なにしろ路面状況が悪くて、スピードは出せなかったし。場所はあなたも知って
いる通りです。近寄ると運転席に人影が見えたので、中を覗き込みました。胸に
ナイフを突きたてた勇太さんが見えたので、助手席の窓を割り、ド

アを開けました。
それからすぐに古川さんに電話をして、別荘にあなたを迎えに行ってくれるよう
頼みました。そして遠藤さんにあなたを起こしてくれるよう電話しました」
話を聞き、柏木達也は満足げに頷いた。
「なにか他に気づいたことはありませんでしたか？」
少し考え込んでから、圭が答えた。
「初めにドアを開けたとき、僅かにアルコールの匂いがしたような気がするん
ですが、車内にアルコールはありましたか？」
「いや、なかったと思いますが」
柏木達也はメモを繰り、撮った写真を確認した。
「だったら僕の勘違いかもしれませんね。鼻水も出ていましたし」
他にはないと言うと、柏木達也は古川正行にここへ来るよう言って欲しいと
頼んだ。立ち上がり、ドアに手をかけた圭が思い出したように振り返った。

「そういえば、皆さんに聞いてもらいたいことがあるんです。この島に僕ら以外の
誰かがいる形跡を見なかったか、って」
柏木達也は質問の意図がわからない、という顔をしていたが、それでも全員に
聞くことを約束した。
全員の話を聞き終えた頃には、時計の針は十時を回っていた。柏木達也が食堂に
入ってきて、疲れた様子で圭の隣に腰を下ろした。
「なにかわかりましたか？」
有紀の質問に、柏木達也は力なく首を振った。古川正行にスコッチを頼んだ。
「そもそも死亡推定時刻がはっきりしない以上、アリバイもなにもありません。
のちのち死亡推定時刻がはっきりしてからの判断になります」
そう言って運ばれてきたグラスに口をつけた。
「実際問題、それも難しいでしょうね。解剖が数日遅れるとなれば、正確な推定は

まず困難です」

まったく圭の指摘どおりだ、というように酒をあおった。

「弟さんは認めたくないようですけど、状況から考えれば自殺の方が自然でしょう」

そう言うと再びグラスに口をつけた。

「そういえば、水野さんに頼まれてた質問ですが、誰もそんな形跡は見ていない

そうです。この島にいるのは私らだけなんじゃないですかね」

「そうですか」

圭が頷いた。

「もしかして水野さん、あの船のこと考えてます？」

柏木達也がようやく気が付いたらしかった。

「あの船で誰かが入ってきている可能性も考えていたんですが、誰もなにも見てい

ないとなると、その可能性は低いのかもしれません」

何しろ小さな島である。島に十三人も人がいて、その誰にも気づかれずに、何日も

潜伏するのは難しい。サーフィンだ、釣りだと島の中を精力的に動き回っていれば

なおさらだ。ツーリングの間、圭自身も注意深く観察していたが、それらしい形跡は

なにも見かけなかった。

「ま、自殺で決まりでしょう。今日はいろいろあって疲れました。私は先に失

礼します」

スコッチの残りを流し込み、柏木達也が部屋へと戻って行った。

八月十六日　午前七時　（1）

圭はロビーに置かれたソファの上で目を覚ました。睡眠と覚醒の間を行ったり
来たりしていたせいで時間の感覚が曖昧だが、少し前からロビーを人が歩く気配が
していた気がする。重力に逆らってまぶたを持ち上げると、柏木達也がテラスの
上から覗き込んでいた。柏木達也は目が合うと愛想笑いを浮かべ、テラスに引っ
込んだ。体を起こしてタオルケットを畳んでいるところに、柏木達也が下りてきた。

「昨日は本当にソファで寝たんですか？」

「僕の部屋は遺体の保管に使っていますからね」

バツが悪そうに柏木達也が口ごもった。本来は警察官である自分が、その役目
を引き受けるべきだったと感じていたのかもしれない。

この日も雨と風が酷かった。朝食はサンドイッチ。中身はハムとレタスだった。

運んできた古川正行に尋ねる。
「天気予報はどうですか？あまり天気は回復していないようですが」
「台風は九州の北に差し掛かってから、ずいぶんと速度を落としているようです。
島から出られるまでには、まだ二三日かかりそうですね」
別荘全体を重苦しい空気が支配していた。圭も一日のほとんどを、食堂で本を読み
ながら過した。テーブルの奥で信之助が仕事を始めたので、圭は離れた席へと
移動した。古川夏美がコーヒーやクッキーを運んできてくれたし、椅子の座り心地も
悪くなかった。ときおり信太郎が電話に向かって怒鳴り散らしたりしなければ、
そこいらの喫茶店より百倍過しやすかったはずだ。信太郎と松田玲子はパソコンと
携帯電話を駆使し、東京にいるのと変わらずに仕事をこなしているように見えた。
聞き耳を立てていたわけではなかったが、新太郎が電話で話していた内容から、

いくつかの言葉が聞き取れた。

新聞、会見、そして対応。

信太郎は既に帰ってからの準備を整えているようだった。

別荘内に閉じ込められ、皆イライラが溜まってきていた。一度などは激昂した

信太郎がテーブルを叩いた拍子に、コーヒーカップがひっくり返り、書類をコーヒー

漬けにした。明らかに自分の落ち度であるにもかかわらず、松田玲子に書類の再印刷

を言いつけると、信太郎は肩を怒らせて食堂から出て行った。テーブルの上を片付

ける松田玲子と古川正行、それに圭の三人は互いに苦笑を浮かべるしかなかった。

そしてその夜、ついに蓄積した鬱憤が爆発した。中島健太と留学生が小競り合いを

起こしたのだ。きっかけは些細な出来事だった。

八月十六日　午前七時　（2）

中島健太と信也は、娯楽室に設えられたバーで酒を飲んでいた。二人で何か話しながら、というわけではない。中島健太はビリヤードをしている留学生を見ながら、ひたすら酒をあおり、信也は横でダーツを放る圭に、絶えず話しかけていた。

圭はカウントダウンというゲームをしていた。三百一点からだんだんと点数を減らしていき、最終的にピッタリゼロにするダーツのゲームである。順調に点数を削り、残り三十二点。信也は話し続け、圭はそれを聞き流していた。

「あんたたちもツイてないね。こんなところまできて事件に巻き込まれて」

十六のダブルを狙った圭の矢が、十六のシングルに刺さる。残り十六点。

「俺があんたらが来るって話したら、柏木のおっさんも驚いてたよ。自分で言うのもなんだけど、あんな体験をしたら、普通呼ばれても来ないって

さ」

二投目。コントロールが狂い、矢は十一のダブルに刺さった。二十二点が引かれ、

けたたましいブザー音と共に得点が三十二点に戻った。

ビリヤードをしていた留学生が、会心のショットを決めてハイタッチした。

もともとイライラしていた中島健太には、それが酷く癪に障った。その上、彼は酷く

酔っていた。

昨日、俺の兄貴が死んだって言うのに、なんだってコイツらはこんなに楽しそうに

してるんだ？不公平じゃないか。文句のひとつでも言ってやらないと気が済まない。

中島健太はグラスを手に、三人が囲んでいるビリヤードテーブルへと歩いていった。

飲みすぎていて、完全に千鳥足だった。

「オイ、オメーら、なにヘラヘラしてんだよ。ああ？」

三人は中島健太を無視した。酔っ払いがなにか言ってるぞ、程度にしか思わな

かったのかもしれない。しかしこの態度が、火に油を注ぐ結果を招いた。無視さ
れたことでさらに腹を立てた彼は、すぐそばで手玉を突こうとキューを構えていた
一人の肩を小突いた。やや不安定な体勢にあった彼は、バランスを崩して転倒した。
それをきっかけに四人がもみ合いとなった。グラスが床に落ち、割れた。
圭が古川正行と信也と共に止めに入り、なんとか場を治めたとき、中島健太は
鼻から血を流し、信也は口を切っていた。圭の口から流暢な英語が飛び出し、
三人を部屋に戻らせた。騒ぎを聞きつけて、救急箱を持った松田玲子が柏木達也と
駆けつけ、二人に応急処置を施した。ふらふらになった中島健太は、鼻にティッシュ
を詰められたまま、柏木達也に付き添われて出て行った。
踏み砕かれて粉々になったグラスを、古川正行と有紀が片付けた。圭を含めた

三人も食堂へと引き上げた。

「なにか飲みますか？」

「是非」

圭の前に琥珀色の液体が入ったグラス置かれた。口をつけると、焼けるように熱い

液体が喉を落ちていった。

「荒れましたね」

グラスの氷をくるくると回しながら、有紀が呟くと、圭が肩をすくめた。

「フラストレーションが溜まっているんでしょう。ろくに外にも出られず、屋内に

閉じ込められているし」

「昨日あんなことがあったばかりですしね」

古川正行が自分にも酒を注ぎながら言った。

別荘の中はしんと静まり返り、古川夫妻が洗う食器の立てる音と、水の流れる

音だけが聞こえていた。娯楽室の電気も消えている。皆、部屋に戻ったのだろう。

「部屋に戻りましょうか」

グラスが空になった頃合を見計らい、二人も食堂を出た。圭は鞄に入っている

文庫本を取るために、有紀の部屋を訪れた。神経が昂ぶり、すぐに眠れるとは

思えなかった。有紀の部屋、その壁際に置かれた旅行鞄の前に屈み込み、中から

文庫本を取り出す。鞄の口を閉じ、立ち上がった。

「おやすみなさい。僕が出たらしっかりと鍵を掛けてくださいね」

ドアに向かって歩く圭に、後ろから有紀が抱きついた。

「遠藤さん？」

回された腕に力が入る。

「泊まっていってくれませんか」

圭がゆっくりと腕を解いた。反転し、正面から有紀と向かい合う。

潤んだ両目が

圭を見つめていた。

圭が頬に右手を添える。有紀が目を閉じる。二人の距離が縮まり、

唇が重なった。

初めは軽く。次第に深く。左手に持っていた文庫本が床に落ちる。

圭が後ろ手でドア

に鍵を掛ける。そのまま有紀を抱え上げ、ベッドの上に横たえると、

再び唇を重ねた。

八月十六日　午前八時三十分　（1）

腕の中で有紀が寝返りを打った。ベッドサイドの時計は八時半を指している。

艶やかな黒髪に指を滑らせると、有紀がゆっくりと目を開けた。

「おはようございます。よく眠れました？」

有紀は圭の胸の上に頭を乗せた。

「はい。ぐっすりと」

「シャワー浴びて、朝食を食べに行きましょうか」

頭をなでながら、圭が言った。

カーテンを開けると、窓ガラスに雨が叩きつけられていた。

「先に食堂に行っています」

ドア越しに有紀に声を掛けた。あくびをかみ殺しながら廊下に出ると、

中島健太の部屋をノックしている古川正行がいた。

「おはようございます。昨晩の様子じゃ、健太さんはまだ起きられないん

じゃないですか？」

古川正行は黄色い液体の入ったタンブラーを盆に載せていた。

「酷い二日酔いになっているだろうと思いましてね。グレープフルーツジュース

を持ってきたんですよ」

タンブラーは盆の上で汗をかいていた。起き抜けの渇いた喉に、それはとても

魅力的に見えた。

「食堂に行けばまだありますよ」

圭が熱心にタンブラーを見つめるので、古川正行が笑って教えてくれた。階段を

下りていくと、ロビーで留学生が何事か相談していたが、圭の姿を見て話すのを

止めた。その態度を不審に思ったが、無視して食堂に足を向けた。

食堂のテーブルには、やはり魅力的に汗をかいたピッチャーが置かれていた。

逆さに置かれたタンブラーを手に取り、冷えたジュースを注ぐ。

食堂には工藤夫妻と松田玲子がいた。圭が挨拶をすると、松田玲

子が笑顔で
答えた。
「昨日はロビーで寝られなかったようですね」
圭はジュースを一口飲むと、微笑み返した。
「怖がっている子犬がいましてね」
「それは黒髪で色白の子犬ですか？」
「ええ、まあ」
二人が話しているところに、血相を変えた古川正行が駆け込んできた。
「水野さん、一緒に来てください」
ただならぬ様子の古川正行を追って、圭は食堂を飛び出した。古川正行を追い越して階段を駆け上がり、半開きになっていたドアを抜ける。圭の目に飛び込んできたのは、床に倒れている中島健太の姿だった。うつ伏せになっている中島健太に駆け寄り、仰向けにする。その体はすっかり冷たくなっていた。

すぐに柏木達也が叩き起こされた。パジャマのまま現れた柏木達也の髪は
ボサボサで、頭の後ろでは寝癖が跳ねていた。洗面台の前に立つ暇もなかったの
だろう。顔は油でテカテカと光っていた。仰向けにされた中島健太の傍らには、
注射器が落ちていた。腕には真新しい注射痕と、ある程度時間の経過した複数の
注射痕があった。

「デジカメを取ってきます」

戻ろうとする柏木達也と一緒に、圭も部屋を出た。

「顔を洗って、着替えてきて大丈夫ですよ。柏木さんが来るまで部屋の外で
待っていますから」

十五分後、さっぱりとした顔の柏木達也が、着替えて部屋を出てきた。顔だけ
洗ってきたらしい。寝癖は直っていなかった。階段に腰掛けていた圭が立ち上がり、
二人で中島健太の部屋に入った。

「薬物を常習していたようですね」

デジカメで腕の写真を撮りながら、柏木達也が言う。

「過剰摂取による事故死でしょうかね？」

圭は質問には答えず、ベッドの上に落ちていたビニールの袋を見ていた。

内部には白い粉が付着している。おそらくこの中に薬物が入っていたのだろう。

その口はハサミのようなものでまっすぐ、丁寧に切られていた。

「水野さん聞いてます？」

柏木達也は作業の手を止め、圭を見つめていた。

「え？ああ、すみません。なんですか？」

柏木達也がイライラした様子で質問を繰り返した。休暇に来て立て続けに遺体に

出くわせば、機嫌も悪くなるだろう。

「どうですかね」

圭はビニール袋を元あった位置に戻した。柏木達也はゴミ箱をひっくり返していた。

「気をつけてください。薬物の常用者は感染症に罹っていることも多いですから。

使用済みの注射器なんかが入っているかもしれませんし」

それを聞いて柏木達也は一度手を引っ込め、ボールペンで慎重にゴミをかき

分け始めた。

「あなたが昨日部屋に送り届けたとき、健太さんはどんな様子でした？」

トランクの中身を確認しながら圭が尋ねた。

「特別変わったところはなかったと思います。もめた直後だったので興奮状態には

ありましたけど。その上かなり酔っていて、足元もおぼつかなかったので、そのまま

ベッドに横たえて。私はすぐに部屋を出ました」

「鍵はどうしたんです？」

柏木達也の目が泳いだが、背を向けていたために、圭はそれを見逃した。

八月十六日　午前八時三十分　（2）

「かけなかったんです」

「かけなかった？」

圭がトランクから目を上げ、振り向いた。

「私が鍵を持って出てしまったら、翌朝目覚めた健太さんが困るだろうと思って」

「そうですか」

なるほど。だから古川正行は扉を開けられたのだ。圭は再びトランクを検める作業に戻った。

中島健太はかなり大きなトランクを持ってきていた。ずいぶんと仲の良い兄弟だったらしい。二人分の荷物を一つのトランクに詰めてきていた。トランクの中には、衣服の間に隠すようにして、四本の注射器と粉末の入った袋が一つ入っていた。

「ゴミ箱の中身は普通のゴミばかりですねえ。薬物につながるようなものは

ありません」

散らかったゴミを戻しながら柏木達也が言った。

「二人とも見つからないように、かなり気を使っていたみたいですね」

トランクの中には使用済みの注射器もあった。針先にキャップがされ、慎重に

しまわれている。トランクの蓋を閉じて、圭が立ち上がった。

「客室の間取りって全室同じではないんですね」

圭や有紀の部屋とは異なり、この部屋にはベッドが二台入っていた。面積が二倍

とまではいかないが、部屋自体も多少広い。柏木達也はもう見るべきところもない、

といった様子でベッドに腰掛けていた。

「そうですね。工藤夫妻も二人で一部屋のようですし。あの留学生たちは三人で

一部屋らしいですよ」

圭はベッドサイドテーブルの抽斗を開けた。そこにはボールペンなどと一緒に、

ハサミがきっちりと収められていた。

「事故でしょうか？」

先ほどはっきりとした答えが得られなかったためか、柏木達也が同じ質問を

繰り返した。あまり不用意なことを言いたくはないんですが、と前置きしてから

圭が答えた。

「事故の可能性は低いと思います」

「なぜです？」

意外だという表情で柏木達也が尋ねた。

「薬の入っていた袋が落ちていましたね。あれはハサミで丁寧に封を切って

ありました。昨晩の健太さんの状態を思い出してください。あなたに肩を貸して

もらわなければ、まっすぐに歩けもしなかった。そんな状態の彼が、そんな風に

開けるとは思えない。ハサミ自体も、ちゃんと引き出しにしまってありましたし」

圭が両手にはめた手袋を脱いだ。

「ですけど、もっと以前に開封されていたという可能性もありますよ」

もっともだという風に圭が頷いた。

「もちろんその可能性もゼロではないでしょう。ですがあの袋はジッパー式ではなく、

一度開けると口を閉じられない。中身が粉末であればなおさらです。留めるための

テープも見当たりませんでしたし、昨日の夜に開けたと考えるのが自然でしょう。

何者かが封を開け、酔いつぶれている健太さんに過剰摂取させたんだと思います」

圭の推理を聞き、柏木達也は何事か考え込んでいた。

二人はクーラーのレベルを最強にし、施錠して部屋をあとにした。

八月十六日　午前八時三十分　（3）

「聞いてもいいですか？」

階段へと続くテラスを歩きながら、柏木達也が圭に尋ねた。圭はいつも思うのだが、

「聞いてもいいですか？」という質問はあまり意味がない。質問の内容がわからない

以上、たいていの場合は続きを聞かざるを得ないし、聞いた本人も質問することを

前提で聞いているからだ。

圭が黙っていると、それを肯定の意味に取った柏木達也が続けて質問した。

「ずいぶんこういった捜査に慣れているように見えますが、あなたは元警官か

なにかですか？遺体を見てもまったく動揺していないように見えますし」

圭はすぐには答えなかったが、やがて諦めたように口を開いた。

「以前にもお話したかもしれませんが、僕は日本に来る前はアメリカに住んで

いました。中学高校の六年間を日本で過しましたが、それ以外は向こうで暮らしていたんです」

「ええ、それは確か聞きました。ずっとアメリカにいたというのに、ずいぶん日本語が上手くて、日本人にしか見えないと思った記憶があります」

「両親は共に日本人ですからね。見た目には日本人と変わりません。それにアメリカに住んでいるくせに、母は英語が不得意でしてね。家の中では日本語が公用語だったんです。そのおかげで自然と日本語も身につきました」

そう言って圭は笑った。

「警官ではないですけど、僕はそういう職場で働いていたんです。今は英会話講師ですが」

「というと、ＦＢＩだとかＣＩＡ？」

予想外の答えに柏木達也は驚きを隠せなかった。

「どうりで慣れているはずですね」

柏木達也は感心したような、呆れたような複雑な表情を浮かべていた。

圭はこの話をするのが好きではなかった。この話をすると、たいていの場合

矢継ぎ早の質問攻めに合う。

殺人犯を逮捕したことはある？

銃を撃ったことはある？

どうして辞めたの？

それはアメリカでも日本でも同じだった。今付き合いのある人間で、圭の

経歴を知るのは、朝井と有紀の二人だけだった。

ここへ来ることを決めた翌週、有紀から電話があった。

「あの、実は私旅行らしい旅行をしたことがなくて。トランクを買いに行きたいん

ですが、付き合ってもらえませんか？」

構わないと伝えると、受話器から聞こえる有紀の声が少し弾んだ気がした。

翌日、二人は量販店を訪れた。せいぜい二三泊だからという圭のアドバイスを受け、
有紀が選んだのは白い、キャスター付きで小さめのトランクだった。持って帰ることも
可能なサイズだったが、有紀は配達伝票にサインをした。
「今度こそ私にご馳走させてください」
有紀が連れて行ったのは、隠れ家のようにひっそりとたたずむ小料理屋だった。
「水野さんが連れて行ってくれたお店みたいに、オシャレじゃないんですけど」
「そんなことありません。こういう雰囲気、好きですよ」
圭がそう言うと、申し訳なさそうな顔をしていた有紀がはにかんだ。自分が元
捜査官だったことを話したのは、この晩のことだった。
「日本に来る前はどんなお仕事をされてたんですか？」
ふと会話が途切れた瞬間に、有紀が何気なく聞いたのだ。正直に答えるか否か、
迷わなかったと言えば嘘になるが、結局圭は話してしまった。それ以上は答えたく

ない、というそぶりを見せれば、しつこく追求しないだけの分別が有紀にはあると
思ったし、事実その通りだった。
柏木達也は続けて何か聞きたそうだったので、圭はそれを以上の追求を避ける
ために歩みを速めた。
二人が食堂に入ると、座っていた人々の目線が一斉に二人を捕らえた。
「皆さんすでにご存知かもしれませんが、中島健太さんが亡くなりました」
柏木達也が改めて報告すると、何人かが息を飲んだ。信太郎の赤みがさした顔
ですら血の気が引き、真っ青に見えた。
「詳しい原因は解剖してみないとわかりませんが、状況から判断して薬物の
過剰摂取によるものと思われます。トランクからは薬物が見つかり、腕には常習の
痕もありました」

すっかり血色が悪くなった信太郎が口を開いた。

「では事故ということかね？」

その口調には事故であって欲しい、という願望が含まれているように聞こえた。

こんな状況に置かれても、世間体が気になるのだろう。自分の別荘で殺人事件が

起こったとなれば、一面でないにしろ、新聞記事になるのは間違いない。

少なくとも週刊誌の格好のネタにはなるだろう。それだけは避けたい、という

様子がにじみ出ていた。

この期に及んでも保身ばかりに気が行くとは。

口には出さなかったが、圭は半ば呆れていた。まあ、会社と従業員を守りたい

という、社長の鑑と言えないこともないのか。

「自殺ということも考えられます。お兄さんが亡くなってかなりショックを

受けておられたようですし。事故か自殺か。それは解剖や正式な捜査を経て、

警察が判断するでしょう」

信太郎はそれを聞いて安心した様子だった。殺人でない言ってもらっただけで、

彼にとっては十分なのだろう。

皆を前にした柏木達也の話は、圭の推理とは大きく異なるものだった。けれど

圭は黙ったまま聞いていた。彼はこの別荘にいる何者かに殺されました、などと

言えば混乱は免れない。なにより自分の推理を裏付ける、確固たる証拠がなかった。

隣では息子の信也が青い顔をしていた。今回、事情聴取は行われなかった。

柏木達也は皆が寝静まったあとのことだし、聞く必要はないと判断したらしい。

圭は記憶が新しいうちに聞いておいたほうがいいと主張したが、柏木達也は県警に

任せるといって聞かなかった。

「それより食事にしましょう。食事は生活の基本ですから」

中島健太の遺体が見つかったせいで、圭と柏木達也は朝から何も口にして
いなかった。すでに時計の針は十二時を回っており、確かに圭も空腹を感じてはいた。
現段階でわかっていることはあまりにも少なかった。詳しいことは検視と鑑識が
入るまではわからないだろう。そう思って圭も強く食い下がらなかった。
古川夫妻が食事を用意してくれるまで、少し時間が空いた。圭は薄暗い娯楽室で、
壁を叩きつけた。
「くそっ。なんでこんなことに」
予想外に大きな音が響いた。それを聞きつけて、心配そうな顔をした有紀が入って
きた。彼女は圭のすぐ後ろで足を止めた。
「どうしてこんなことになってしまったんでしょうか」
圭が大きなため息をついた。
「わかりません。ともかく用心しないと」

こめかみをぐりぐりマッサージしながら圭が呟いた。食事ができたらしく、食堂から

古川正行の呼ぶ声が聞こえた。

八月十七日　午前四時　（1）

物音が聞こえた気がして、圭は目を開けた。明け方四時。古川夫妻が朝食の
仕込をしているにしても、早過ぎる時間だった。隣では有紀が静かに寝息を
立てている。

カタン。

じっと耳を澄ますと、今度ははっきりと聞こえた。椅子の足が床に当たる
ような音だ。眠っている有紀を起こさないように、頭の下からそっと腕を
引き抜いた。体を滑らせるようにベッドから出ると、ジーンズを履いてシャツを
被った。ベルトのバックルが小さな金属音を立て、有紀が寝返りを打った。

「今、何時ですか？」

「すみません。起こしてしまいましたか」

圭は静かに微笑んだ。

「物音がしたので、ちょっと見てきます。まだ早いですから、もう一眠りして
いてください」
そう言って有紀に掛かっている布団を直し、有紀の肩に手を置いた。
部屋を出て鍵を掛けた。テラス部分には誰もいなかった。再び物音が聞こえ、
思わず圭が姿勢を低くする。さっきよりもはっきりとした音、ドアが閉まる音の
ようだ。手すりから身を乗り出して覗き込むと、食堂からチラチラと光が漏れて
いて、そこへ向かって歩く影があった。背格好からは男性に見える。古川正行
かもしれない。すると今の音は、彼が部屋を出る音だったのか。
そのまま部屋に戻っても良かったが、なんとなく胸騒ぎを覚えて、足音を
立てずに歩き出した。さっきの音の主が古川正行だったとして、その前の物音は
なんだろうか。それに食堂にいるのは誰なのか。別荘内の誰かが空

腹か喉の
渇きを覚え、食堂を訪れていると考えるのが自然だが、だとすれば漏れている光
の説明がつかない。それだったら照明を点ければいいはずだ。ときおり漏れる
光は細く、懐中電灯のように見える。古川正行が食堂内に消えるのとほぼ同時に、
階段を降り始める。

「何してるんだ！」

照明が点き、食堂から古川正行の声が聞こえた。一段飛ばしで階段を下り、
食堂に入ると、古川正行が留学生三人と対峙していた。

「どうしました？」

「ああ、水野さん。物音がしたので来てみたら、あの三人がアレを」

見れば一人が懐中電灯を持ち、もう一人が鞄の口を押さえていた。
そして三人目は
飾られていたアンティークの銀食器を手に立っていた。食堂には木製の飾り棚が

設えてあった。細かな細工を施された、よく磨き上げられている棚。そこには
アンティークの食器が飾られており、当然のことながら、棚以上に良く磨かれていた。
圭自身、古川夏美がそれを磨いているのを、既に二度ほど目にしていた。松田玲子の
説明によれば、それらの食器は売れば車の一台や二台買えてしまうほどの価値が
あるらしい。

「元に、戻すんだ」

圭が日本語ではっきりと伝えると、一瞬考えるようにお互いを見つめ、手にしていた
皿を棚に戻した。

「鞄の中のものも」

鞄を指差すと、意味がわからないという風に首を傾げてみせた。
圭が中身を確認し
ようと、三人に二歩三歩と近づくと、諦めたように鞄から銀食器を取り出し、それも

棚に戻した。

「これで全部揃っていますか？」

古川正行が棚を念入りに確認し、大丈夫だと頷いた。圭が部屋に戻るよう促すと、

三人はしぶしぶドアに向かって歩き出した。だが食堂を出るより先に、信太郎がドアの前に現れた。

「何の騒ぎだ？」

五人の間に奇妙な沈黙が流れた。

八月十七日　午前四時　（2）

「古川くん、説明を」

信太郎に促され、古川正行が口を開いた。説明を聞いている信太郎の顔がみるみるうちに赤くなり、握った拳がわなわなと震えた。殴りかかったら止めるべきだろうか、と考えていたが、信太郎は拳を振り上げなかった。

「お前たちの処遇は東京に戻ってから決める」

三人は信太郎の脇を抜けて出て行き、信太郎自身も部屋へ戻って行った。

「コーヒーでも淹れましょうか？」

圭は申し出を断った。

「僕は部屋に戻ります。この時間なら、まだもう少し眠れますから」

とうに空が白み始める時間だったが、厚く空を覆う雲のせいで、廊下は深夜のように暗かった。部屋に入ると、横になっている有紀と目が合った。邪魔なベルトを外し、

ベッドに潜り込む。

「何かあったんですか？」

「大したことじゃありません」

圭は有紀の体を抱き寄せると、目を閉じた。

結局うつらうつらしているうちに朝を迎えてしまった。食堂で顔を合わせた二人は、

お互いに苦笑いを浮かべた。

さっきは大変でしたね。

口にこそ出さないが、二人の目線は同じ意味を含んでいた。

コーヒーを飲んでいると、古川正行に話しかけられた。

「今日のお昼は揃って食べましょう。せっかく全員出かけずにいますし、少し豪華

なものを用意しますから。そのくらいの楽しみがあってもいいでしょう？」

そうですねと答える有紀の隣で、あくびを噛み殺した。

この日の午前中、圭はロビーのソファでウトウトして過した。肩を叩かれて目を

開けると、目の前に有紀の顔があった。

「もうお昼ですよ」

二人で食堂に入ると、まだ埋まっていない席があった。圭と有紀の分を除いても、

三つの席が空いている。二つは中島兄弟の分として、もう一つ数が合わない。

工藤信也がまだ姿を見せていなかった。

厨房からは肉の焼ける香ばしい匂いが漂っていた。

食事の準備はすっかり準備が整ったらしい。さきほどから古川正行が、厨房から顔を

覗かせたり引っ込めたりしている。

「私、呼んできます」

そわそわした空気を感じ取って、松田玲子が立ち上がり、食堂を出て行った。

「いい匂いですね」

誰からともなくそう言い合っているところに、松田玲子が戻ってきた。工藤信也は

一緒ではなかった。彼女はしきりに首をかしげていた。

「部屋をノックしたのですが、出てこられないのです」

彼女によるとかなり強くノックしても、出てくる様子がないという。この日は朝から

誰も信也の姿を見ていなかった。圭はなんだか嫌な予感がした。二体も死体を目撃し、

過敏になっているのかもしれないが、確かめておいたほうが良い、と本能が警告して

いた。

「古川さん、スペアキーはありますか？」

「スペアキーはありませんが、マスターキーが一つだけあります」

「ではそれを持ってきてください。部屋を開けたいので、どちらか一緒に来て

いただけませんか？」

工藤夫妻に問いかけると、奈緒子が立ち上がった。古川正行が鍵を取りに行き、

圭は奈緒子と共に部屋の前で待っていた。改めて部屋をノックしてみるが、やはり

反応はない。そこへ古川正行が鍵を持ってきた。古川正行が鍵を開け、奈緒子が

部屋に入る。

「信也？入りますよ？」

奈緒子に続いて二人も部屋に入ったが、中には誰もいなかった。プールのような

臭いに古川正行が顔をしかめた。圭はバスルームに続く扉に一枚の紙が貼られて

いるのを見つけた。

八月十七日　午前四時　（3）

キケン。塩素ガス発生中。

太いペンで殴り書きされたその紙をみて、奈緒子がドアノブに飛びついた。

「開けるなっ！　」

圭が慌ててそれを制する。

「どうして！　信也が、信也が！　」

半狂乱と化している奈緒子を抑えながら、一度部屋を出た。騒ぎを聞きつけて、

食堂にいた人間が階段を上がってきた。奈緒子を信太郎に預け、圭が状況を

説明した。

「部屋の中で塩素ガスが発生している可能性があります」

「放して！　早くドアを開けないと信也が」

この間も奈緒子はわめき散らしていた。必死に奈緒子を抑えながら、信太郎が

尋ねた。

「どうしてドアを開けちゃいかんのだ？　」

「二次中毒の危険があります。医療設備のないこの島で、そんなことになれば全員

死にますよ」

「ではこのまま放って置くというのか！　」

「放ってはおきません。皆さん指示通りにしてください。まず開いている窓やドアが

あったらすべて閉めてください。それからいくつか道具が必要なんですが」

圭が挙げたのは、ホース、消石灰、ガムテープ、そして水中眼鏡だった。

「それなら確か車庫にあったと思います」

全員が別荘内に散った。両隣の部屋の鍵を開ける。左隣が柏木達也の部屋、

右隣は有紀の部屋だった。圭は信也の部屋に戻り、窓を開けた。鍵はかかって

いなかった。風向きを確かめると、風は左から右に向かって吹いていた。圭が

部屋を出ると、古川正行が頼んだ道具を持ってきた。二人はホース以外の道具を
信也の部屋に入れ、柏木達也の部屋のバスルームにホースを繋いだ。圭がホースの
先を咥え、柏木達也の部屋の窓から外に出た。雨どいに手をかけ、僅かな足場に
つま先を引っ掛けると、窓から信也の部屋に入り、ガムテープで信也の部屋と廊下
を繋ぐ扉を目張りした。

圭は窓から顔を出し、大きく一つ深呼吸した。水中眼鏡をかけ、バスルームの前
まで戻る。そして一気に扉をぶち破る。床の上には二種類の洗剤のボトルが
転がっていた。そしてバスタブにはまるようにして、信也が倒れていた。すでに息を
していない。圭はバスタブの外に向かってシャワーを全開にし、ぐったりとしている
信也を担いだ。信也を窓の下に横たえると、再び窓から柏木の部屋へと戻った。
雨で濡れた雨どいは滑りやすく、危うく地面に落ちかけた。窓から

顔を出す

古川正行が、息を飲む音が聞こえた気がした。

「はあ、ホースの、水を、はあ、出して、ください」

さすがの圭も息が上がっていた。古川正行が水を出す。ホースの先は、便座の上に

固定されていた。圭はホースを潰さないよう、慎重に窓を閉めた。

「体についた塩素ガスを流さないと」

圭は服を脱ぎ、シャワーで体をよく流した。

全員が食堂に集まっていた。皆沈んだ表情を浮かべていたが、中でも工藤夫妻は

酷かった。圭が食堂に入ると、奈緒子が立ち上がった。先ほどまでに比べると

いくらか落ち着いたようにも見える。

「信也はどうでした？　」

圭は一度目を瞑り、ゆっくりと開いた。

「バスルームの中にいました。厳しい状況だと思います」

「そんな……」

奈緒子が椅子の上に崩れ落ちた。信太郎が慰めるようにその肩を抱いた。

「それで、これからどうするんですか？」

古川正行が尋ねた。

「三十分ほど待ちましょう。今ホースとシャワーで水をまいています。塩素ガスは

非常に水に溶けやすいんです」

八月十七日　午前四時　（4）

長い長い三十分だった。圭と古川正行の二人が部屋の前に立った。ガスが残っている可能性もあるので、なるべく少人数の方が良いと判断
してのことである。

「いいですか、塩素ガスは非常に重い性質を持っています。風通しの
悪いところにはガスが残っている可能性もありますから、気をつけてください」

真剣な顔で古川正行が頷いた。

「では行きます。バスルームの床は、塩素ガスの溶けた塩酸で濡れている
はずです。それを消石灰で中和してから、信也さんを運び出しましょう」

「中和されたかどうかはどうやって確かめるんですか？」

「酸が残っていれば、消石灰を撒いたときに泡が出ます。それが目安です」

再び古川正行が頷く。二人は内側から目張りされたドアを破った。
部屋の中に、鼻をツンと突くような塩素ガスの臭いはなかった。
二人で
消石灰を撒きながら、少しずつ窓に近づく。しゅわしゅわと泡を発する
塩酸をなんとか中和し、信也までたどり着いたが、すでに手遅れだった。
消石灰で真っ白になった二人が部屋を出ると、扉の外には心配そうに立つ
工藤夫妻の姿かあった。圭が黙って首を振ると、奈緒子がその場に崩れ落ちた。
「信也の顔を見たいんだが」
妻を支えるようにして立つ信也が言った。二人は柏木達也に付き添われて
部屋の中に入っていった。
少し離れたところに立っていた有紀が歩み寄ってくる。部屋の鍵を開けて
もらい、体中に付いた消石灰の粉をシャワーで流した。
この日の夕食はさながらお通夜のようだった。奈緒子はショック

のあまり、
部屋から出てこなかった。さらに空席の目立つようになった食堂で、食事は
会話もほとんどなく進んだ。
「さっきラジオで言っていたのですが」
皿を持ってきた古川正行が、なんとかして会話のきっかけを作ろうとした。
「台風は今夜中にも抜けるそうです。明日には帰れますよ」
そう言ってテーブルを見渡したが、有紀があいまいに微笑んだだけだった。
他の人間は思いつめたような表情で、目の前の料理を口に運んでいた。
食事が終わると、皆部屋へと戻って行った。圭はコーヒーの入ったカップを
手に、考え事をしていた。食堂には圭と有紀だけが残された。
「あの、ちょっとよろしいですか？」
話しかけてきたのは松田玲子だった。
「急ぎ作成しなければならない書類があるのですが、その形式が

英語なのです。
実は私はあまり英語が得意ではなくて。水野さんは英会話の講師をなさっている
のでしょう？少し手伝っていただけませんか？」
部屋を移ったおかげで、圭の荷物はほとんど解かれておらず、荷造りは終わった
ようなものだった。構いませんよと答えると、松田玲子はほっとしたような表情を
浮かべた。
「それでは私は部屋に戻ります。荷造りもしなきゃならないし」
有紀が部屋に引き上げ、食堂には松田玲子と圭だけが残された。
松田玲子が
ノートパソコンとプリンターを持ち込み、圭のアドバイスを受けながら書類作成を
進めた。
作成を終え、最終チェックを済ませたのは、開始から一時間ほど経過した頃だった。
圭がプリントアウトした書類の端を揃えた。

「うん。オーケー。これならどこに出しても問題ないと思います」
「良かった。これで社長に怒鳴られずに済みそうです。仕事も終わりですし、何か
飲み物をお持ちしましょうか？」
「いや、やめておきます。明日はヘリや船に揺られなきゃならないのに、アルコール
を飲むのは自殺行為です」
テーブルの上に散らばったメモに目をやると、見覚えのある字が並んでいた。

八月十七日　午前四時　（5）

「僕らに届いた招待状、書いたのはあなただったんですね」

「ええ、社長に命じられたものですから」

そう言うと申し訳なさそうに視線を落とした。

「すみません。あなたを責めているわけじゃないんです。ただ同じ文面

とはいえ、何通も書くのは大変だったろうなあ、と思いまして」

「そんなことはありません。たったの二通ですし」

「二通？」

圭の眉間にしわが寄り、松田玲子は少したじろいだ。

「はい。私が書いたのは、水野さんと遠藤さん宛ての二通だけです。

社長は信也さんに頼まれたと」

「では中島さんたちや柏木さんの招待状は？」

「さあ、わかりません。あの方たちは信也さんが直接招待したはずですから。

そもそも招待状なんて面倒なもの出していないんじゃないかしら」

テーブルの上に置かれた圭の携帯が鳴った。有紀からのメールだった。

「寂しいです。早く戻ってきてください」

それを読むと、圭は椅子から立ち上がった。

「では私はここを片付けてから部屋に戻ります。本当にありがとうございました」

松田玲子も立ち上がり、深々と頭を下げた。

圭は早足で階段を上った。部屋の前まで来ると、中から椅子が倒れるような音が聞こえた。圭は眉間にしわを寄せながら、有紀の部屋をノックした。

返事がない。

もう一度、今度は強めにノックをする。一拍おいてドアノブに手を伸ばした

とき、内側から弾けるようにドアが開いた。そこに立っていたのは有紀ではなく、

柏木達也だった。顔面蒼白になっている。

「ああ、水野さん」

首の後ろを嫌な汗が流れ落ちた。

「遠藤さんが、遠藤さんが亡くなった」

目の前の景色がゆがんだ。ハンマーで側頭部を殴られた気がした。

「有紀！」

柏木達也を突き飛ばして部屋へ飛び込んだ。すぐにベッドの上に横たわる有紀が

目に入った。ベッドサイドには錠剤の入ったビンと、水が半分ほど残ったコップが

置いてある。覆いかぶさるようにして、首筋に手を当てる。彼女の体はまだ温か

かった。呼吸を確かめるかのように、頬を有紀の顔に近づけた。

「私が来たときにはすでに息がなかった」

まるで言い訳をするように柏木達也が呟いた。

「こんなときに言い難いんだが、テーブルの上に遺書がある」

それを聞いて圭が振り向いた。柏木が圭に背を向け、テーブルの

前に立っていた。
—水野さん、まずはあなたに謝らなくてはなりません。ごめんなさい。こんな
はずではありませんでした。ただ彼らを目の前にして、どうしても、どうしても
我慢できなかったのです。
あの事件の後、私は精神的に参ってしまいました。恐怖で夜中に目を覚ますことも
珍しくありません。なのに彼らはのうのうと生活しています。私にはどうしても
許せませんでした。私は中島健太を過剰摂取に見せかけて殺しました。彼は酷く
酔っていましたし、私が訪ねていくとあっさりとドアを開けてくれました。あとは
簡単でした。工藤信也を殺したのも私です。中島健太の死体が見つかり、皆が
ばたばたと動き回っている隙に、塩素ガス自殺に見せかけました。すべて上手く
いきました。けれど今度は私自身が耐えられませんでした。あんな人間でも、

殺せば罪悪感を感じるものです。こんなことに巻き込んでしまってごめんなさい。

さようなら。—

圭は黙って遺書を読んだ。柏木達也が圭の肩に手を置いた。

「なんと言ったらいいか」

肩に置かれた手を退け、圭が言った。

「部屋を出ましょう。彼女がすべてを告白して死んだ以上、これ以上現場を荒らしたくない」

圭はテーブルから鍵を取った。一度扉に向かって歩き出してから、踵を返して有紀の傍らに立った。さよならを告げるように、有紀の額に軽くキスをする。

圭は部屋を出た。柏木達也もそれに続き、圭が扉を施錠した。それが済むと鍵を柏木達也に手渡した。

「少し夜風に当たってきます」

古川正行からドゥカティの鍵を借り受け、圭は夜の闇に消えていった。

真っ暗な中、ドゥカティのエンジン音だけが響き、そしてそれも聞こえなくなった。

古川正行には圭から一切の感情が消え去ってしまったように見えた。雨は既に上がっていた。

圭が別荘に戻ったのは、たっぷり数時間も経ってからだった。

八月十八日　午前十一時　（1）

「こんなところに集めて、いまさら何だと言うのかね？」

翌日は快晴だった。圭は全員を食堂に集めていた。

「いえね、実は皆さんにちょっとしたショーを見ていただこうと思いまして」

圭の顔には笑顔が浮かんでいた。

「ショーだと？ふざけるな！息子が死んだんだぞ。こんなときにショーなどと」

耳まで真っ赤にした信太郎が憤る。

「まあ、そう言わないでください。これは重要なことなんですよ。あなたにとっても、僕にとってもね」

「お前だって友人が一人死んだんだぞ！よくヘラヘラと笑っていられるものだ」

それを聞いて圭が悲しげに微笑んだ。

「たとえ親が死んだとしても、舞台の上では笑顔でいられないと、マジシャンは

務まらないんですよ」

仕切り直しです、そう言って圭は一つ手を叩いた。

「ヘリが来るまではまだ時間がある。暇つぶしだと思ってお付き合いください」

圭は準備完了とばかりに胸の前で手を擦り合わせた。

「では、始めましょうか」

ポケットから三枚の硬貨を取り出した。それを机の上に並べると、真ん中と右に

置かれた硬貨に、それぞれ左右の手を重ねた。

「さて、信太郎さん。ちょっとお尋ねしますが、今、僕の右手の下にはコインが

何枚ありますか？」

信太郎の表情が険しくなる。

「馬鹿にしているのか？一枚だろう」

圭が掌でテーブルを軽く擦り、右手を持ち上げると、そこには一枚の硬貨も

なかった。無論、掌は開かれたままである。驚いた顔を見て、圭は満足そうに笑う。

「コインはほんのちょっと場所を移動したんです」

そう言って左手を持ち上げると、そこには二枚の硬貨があった。

圭は満足そうに

左手を振って見せた。

「もう一度お見せしましょう」

圭は二枚になった硬貨の上に右手を、一枚残った硬貨の上に左手を乗せた。

そうして両手でテーブルをこすると、右手を持ち上げた。そこには三枚の硬貨が

あった。続いて持ち上げた左手の下の硬貨は消えていた。左手で三枚の硬貨を

掴むと、それをポケットの中に戻した。

驚いていた信太郎が口を開いた。

「君がマジシャンなのはわかった。だが、だからなんだというのだ？」

慌てない慌てない。圭が指をワイパーのように振って見せた。

「まだショーは始まったばかりです。重要なのはここからですよ」

そう言って微笑むと、背中を向けて両手を広げた。

「そう、いわばこれは推理ショー。名探偵に扮したワタクシメが、今回の事件の

真犯人を明らかにするのです」

芝居がかった調子で続ける圭の言葉を、青い顔をした奈緒子が遮った。

「あの女が信也を殺したのよ！自分でそう書き残したんでしょう」

圭が眉根を少し寄せた。

「昨日水野さんがバイクで出かけられたあと、柏木さんが簡単に説明をして

下さったんです」

「なるほど」

圭が二度三度頷いた。

「確かに、一見そういう風に見えます。ですがそれは真実じゃない。マジックと

同じ、タネとシカケがあるんです」

「いいだろう。そこまで言うなら聞こうじゃないか」

信太郎が妻の手を握って言った。

「ありがとうございます。さて、事件は四つ。一つずつ追っていきましょう」

圭はテーブルの前を行ったり来たりしながら話し始めた。

「まず第一の事件。トラックの車内で勇太さんが刺殺された事件ですが、

松田さんが指摘した通りの方法で密室は作れます」

そう言うと松田玲子の方を見て微笑んだ。

「ですが、あれは自殺だったのではないかと思います。柏木さんと車内を検め

ましたが、他殺を思わせるような痕跡はありませんでしたし。ですよね？」

「ええ、特には」

話題を振られた柏木達也が頷いた。

「私が確信を持っているのは残りの三つ。まず中島健太さんの事件。これは

遠藤さんが書き残した手順の通りでしょう。酔いつぶれた健太さんの部屋を訪れ、

過剰摂取に見せかけて多量の薬物を静注する。彼は相当酔っていたから、そう
難しくはなかったはずです。普段から薬物を常用している健太さんなら、事故か
自殺に見えますしね。けれど僕は違和感を抱きました」
圭がその指をぱちんと鳴らした。
「僕に違和感を抱かせたのは、薬物の入っていたビニール袋でした。あれだけ
酔っていて、歩くこともままならないのに、ビニールは丁寧にハサミを使って
開封されていた。その上ハサミは引き出しの中に戻してありました。おかしい
でしょう？僕が彼の立場だったら、面倒でハサミなんて使わないでしょうし、
使ったとしても引き出しに戻したりはしません」
「君の推理は筋が通っているように思えるがね」
妻の手を握っていた信太郎が尋ねた。
「結局、遠藤が犯人だったことを示しているんじゃないのか？」

「いいえ、それは違います」

八月十八日　午前十一時　（2）

圭が大げさに首を振りながら答えた。

「これはあくまでも『彼女にも犯行が可能だった』ということを示しているに

過ぎません。裏を返せば、僕にも、そしてあなたにも可能だったということです」

それを聞いた信太郎が声を荒げた。

「私を殺人犯呼ばわりするのか！」

「落ち着いてください。可能だった、というだけであなたが犯人だなんて

言っていません」

信太郎を落ち着かせると、圭は推理の続きを話し始めた。

「次に第三の事件。信也さんが亡くなった事件です。犯人は信也さんが起きる

前に、窓から部屋に侵入したんでしょう。窓は鍵も開いていましたしね。

あとは犯行後にもう一度窓から出て、自分の部屋に戻った。塩素ガスを中和した

とき、僕にも簡単にやれましたよ」

「あの、信也さんの隣は、やはり遠藤さんの部屋です」

古川正行が言い難そうに補足する。

「そう、確かに遠藤さんの部屋は信也さんの部屋の隣だ。けれど隣の部屋は

もう一つある」

全員の視線が一人に集まった。圭の目線がまっすぐにその一人に向けられる。

「犯人はあなたです。あなたが三人を殺し、遠藤さんを脅して遺書を書かせ、

薬を飲ませたんだ」

隣に座っていた松田玲子が少し椅子を引いた。柏木達也が引きつった笑顔で

否定する。

「言いがかりだ。第一あのとき、私は食堂で健太さんが亡くなった晩の話を

聞いていた。午前中ずっとだ。」

それを聞いても圭の表情は変わらなかった。

「すぐに戻ります」

そう言うと厨房に消え、何かを手にして戻ってきた。

「こういうものを使えば、なにもその場にいなくても洗剤を混ぜられます」

圭の手に載せられていたのは氷だった。立方体の氷をいくつか組み合わせ、

大きな立方体を形成している。

「まずは信也さんに当て身でも食らわせて、気絶させます」

それを聞いて嘲るように柏木達也が笑った。

「そんなことをすればアザが残ってしまう」

「ええ、アザが残ってしまう。ですが残っても構わなかったんです」

柏木達也を除く全員がわけがわからない、という表情を浮かべていた。

「実に上手い手でしたよ。あの前夜、娯楽室で留学生との間にひと悶着あった。

あの状況ならアザの一つや二つできていてもおかしくない」

柏木達也が呻くような声を出した気がした。

「気絶した信也さんをバスルームに運んだあなたは、床に洗剤を一種類撒いた。

あとはこの氷を傾けたもう一種類の洗剤ボトルの下に噛ませればいい。時間が

経てば氷が溶けて、二種類の洗剤が混ざり合うという寸法です」

全員が驚いたような顔で柏木達也を見ていた。

「だが、それは遠藤にもやれたことだ。さっき君自身がそう言ったじゃないか」

それを聞いて圭が満足げに頷く。

「実は皆さんに謝らなくてはならないことが一つあります。私は先ほど嘘を

つきました。彼女にも犯行が可能だった、というのがそれです」

僅かに腰を折り、詫びたような姿勢を見せると、再び柏木達也の方に向き直った。

「ところで柏木さん、遠藤さんが書き残した遺書には、健太さんの殺害について、

どう書かれていたか覚えていますか？」

突然話題を変えられ、柏木達也が怪訝な顔をした。

「部屋を訪れて、薬物の過剰摂取に見せかけて殺した、と書かれていたと思うが」

それを聞いて圭がにやっと笑った。

「ええ、その通り。そう書いてありました」

圭が右手の中指で、眉間をトントンと叩いた。

「ですがそれは絶対に不可能なんですよ。なぜなら彼女にはアリバイがあった。

あなたが健太さんを連れて娯楽室を出てから、彼女は僕のそばを片時も離れなかったんです」

そういえば、と松田玲子が目を見張った。

「一度食堂に移って、そのあとは朝まで同じベッドの中にいました。その彼女に

健太さんの部屋を訪れることなんてできたはずがないんです」

柏木達也は酸欠になった金魚のように、口をパクパクとさせていた。

「だからといって、私がやったことには」

やっとのことで搾り出した言い訳が、圭に通用するはずもなかった。

「あなたはあの前日、僕がロビーのソファで寝ているのを見た。だからあの晩も

僕がそこにいるはずだと思い込んだんだ。テラスの構造上、身を乗り出して覗き

込まないとロビーは見えないし、ドアが開いてもロビーからは見えませんからね」

「だから、それならここにいる全員が」

圭は首を横に振った。

「そうはならないんですよ。あの日僕が遠藤さんの部屋で寝たことは、みなさん

ご存知なんです。部屋を出たところで古川さんに会いましたし、食堂に降りて

松田さんともその話になりました。工藤夫妻もその場にいた。僕が起き出すより

早く、ロビーにいた留学生も除外できます。誰かが遺書を書かせたとして、

あんな内容を指示するはずがないんですよ。そのことを知らなかったあなた

以外にはね」

それでも柏木達也は諦めなかった。それどころかここへきて少し落ち着きを

取り戻して見えた。

「確かにそうかもしれない。だが証拠がない。私がやったという証拠があるなら、

今すぐ見せてもらおうか」

それを聞いた圭の表情が曇る。

「証拠は、証拠はありません」

勝ち誇ったように柏木達也が笑った。

「状況証拠だけとは、とんだ名探偵だな」

圭はテーブルの上のピッチャーから水を一杯注いだ。

「どうやら、失態を犯してしまったようですね。これだけ追い詰めれば自白して

くれるかと思ったのですが、甘かったようです」

そう言うと圭はポケットから錠剤の入った小瓶を取り出した。

「昨日遠藤さんの部屋から出るときに、こっそりと持ち出してきました」

圭の手の中で白い錠剤がからからと音を立てる。

「それではショーを終わりにしましょう。醜態を晒した探偵は、自らの命を絶って幕を引きます」

言うが速いか、掌に乗せた錠剤を口に入れ、水で流し込んだ。途端に圭が苦しみ、

喉を押さえ、膝を折った。

八月十八日　午前十一時二十分　（1）

「水野さん！」

心配した松田玲子が駆け寄る。それを圭自身が制した。すっくと立ち上がると、笑みを浮かべた。

「言ったでしょう？これはショーです。ショーで人は死にません。事故以外ではね」

圭が松田玲子にウインクした。

「でも確かに、薬を飲んだように見えたのに」

不思議がる松田玲子に、圭が左の掌を見せた。そこにはピッタリと錠剤が収まっていた。

「一番初めに見せたコインマジックの要領です。パーム、と言って開いた掌にコインを固定する技術ですよ」

圭はどこからか一枚のシーツを取り出し、自分の首から下を隠すように広げた。その顔には相変わらず笑みが浮かんでいる。

「実はあるんです、証拠」

柏木達也の眉間にシワが寄る。

「お見せしましょう」

そう言うとシーツをパンと鳴らした。

「ワン、ツー、スリー！」

サッとシーツをよけると、そこに一人の女性が立っていた。その姿を見て

柏木達也が短い悲鳴を上げる。そこに立っていたのは紛れもなく有紀であった。

八月十八日　午前十一時二十分　（2）

圭はバイクに跨ると、真っ暗な道路を飛ばした。一条のヘッドライトが
行く先を照らす。別荘からある程度離れると、圭はバイクを止めた。
携帯を取り出し、ある番号に電話をかける。ワンコールで相手が取り、
小さな声で答えた。

「もしもし」

電話の相手は有紀だった。

「肝を冷やしましたよ。説明してもらえますか？」

「部屋に戻って少し経ったころ、柏木さんが部屋に来たんです。勇太さん
が亡くなったことについて聞きたいことがあるとかで。部屋に入ってくると
突然ナイフを取り出して、言うとおりにしないと殺すと脅されました」

話しながら興奮してきたのか、有紀の声がだんだんと大きくなっていた。

「遠藤さん、少し声のトーンを落としてください。部屋には誰も入って
こられませんが、声が外に漏れるとまずい」
「あ、はい。あの人はナイフを突きつけて」
そこまで言って躊躇うように言葉を切る。
「喉を切り裂かれたくなかったら、言うとおり遺書を書くように言いました。
そうすれば苦しまないよう薬で殺してやる、と」
なるほど、そういうわけだったのか。圭は相槌を打って会話の先を促しながら、
今までの違和感が確信に変わっていくのを感じていた。
「私は言われたとおりに遺書を書きました。そして薬を手渡されたんです。
私はベッドの上で飲んでもいいかと尋ねました。彼が許可したので、私は
ベッドに移り、パームを使って薬を飲んだように見せかけたんです。上手く
いくかもしれないと思って」

圭は有紀の機転に感心したが、新たな疑問も浮かんだ。
「危険な賭けですね。あいつはきっと死んだかどうか確認したでしょう？」
「抜群のタイミングでした。私が薬を飲んだ振りをして、ベッドに倒れ
込んだ直後に、水野さんが扉をノックしたんです。あの人には確かめる時間が
ありませんでした」
「明日、全員の前で明らかにしましょう。そのためにいくつか守ってもらい
たいことがあります」
電話の向こうでメモの準備をしている気配がした。
「一晩だけでいい、決して生きていることを悟られないこと。シャワーは
我慢してください。トイレは使っても構いませんが、水を流してはいけません。
きついかもしれませんがお願いします」
「わかりました。たった一晩です。なんとでもなりますよ」

たった今殺されそうになったばかりだというのに、有紀は気丈に振舞った。

「とにかく生きていてくれてよかった」

「ええ、本当に」

一瞬の間を置いて、静かに有紀が答えた。

八月十八日　午前十一時二十分　（3）

「もちろん幽霊なんかじゃありません。正真正銘遠藤さんです」

青白い顔をした柏木達也は、ぱくぱくと口を開けたり閉じたりしていた。

「おかしいですねえ。あなたは昨夜、確かに遠藤さんが亡くなったと言ったのに」

鯉のように空気を飲み込む柏木達也を無視し、圭が続ける。

「刑事であるあなたが、生きている人間と遺体の区別がつかないなんてことがあるでしょうか？」

簡単にシーツを畳み、椅子の背にかけた。

「さっきの松田さんと同じように、あなたにも遠藤さんが薬を飲んだように見えたんでしょう？」

「ちょっといいかね？」

口を挟んだのは信太郎だった。
「私にも薬を飲んだように見えたよ。見えたがね、そんなもの近づけば
息をしているのがわかるんじゃないのか？」
待ってましたとばかりに圭が微笑んだ。
「そう、それは本当にラッキーでした。信太郎さんが言うように、調べれば
すぐに見破られたでしょう。ですが彼にはその時間がなかったんですよ。
それを確かめるより速く、僕がドアをノックしたからです。僕は信心深い
性質ではありませんが、今回ばかりは神に感謝になくてはなりませんね」
勝ち誇ったように笑みを浮かべる圭に、松田玲子が尋ねた。
「ですが水野さんが部屋を出たあとに、確認のため戻ってくる可能性もあっ
たのではないですか？」
「それもできません」

そう言うと圭はポケットからキーホルダーの付いていない鍵を摘み上げた。

「遠藤さんの部屋の鍵はここにあるからです」

柏木達也がポケットから三本の鍵を取り出し、テーブルの上に叩きつけた。

「そんなはずはない！鍵はここにある」

やれやれ、という風に圭が首を振る。

「それは僕の自宅の鍵ですよ。最後に僕が遠藤さんにキスしたとき、あなた

僕らから離れて立っていたでしょう？あのときすり替えさせてもらいました。

あなたからは僕の体で死角になって見えなかったはずだ。キーホルダーに

下がっているだけで、本物だと思い込んでしまう。人間の観察力なんて

こんなものです」

がっくりとうなだれる柏木達也に、全員の視線が集まった。

「さて、何か弁明はありますか？」

そう圭が問いかけても、柏木達也は視線を床に落としたままだった。

次の瞬間、乾いた音を立て、奈緒子の平手打ちが柏木達也に炸裂した。

「どうして信也を殺したの！」

柏木達也の襟首を掴み、奈緒子が問い詰めた。それでも柏木達也は黙ったままだった。

「あなたは脅迫されていたのではないですか？」

圭が問いかける。その顔から笑顔は消えていた。

「犯人があなただと確信したとき、僕は亡くなった三人とあなたの間の奇妙な共通点に気が付きました。真夏だというのに、三人とも長袖以外は着ない。となると腕に何か隠したいものがある、と考えるのが自然です」

「あの兄弟は、私に覚せい剤を売っていた売人だった」

黙っていた柏木達也が、ぽつりぽつりと話し始めた。

八月十八日　午前十一時二十分　（４）

工藤信也に撃たれたことは有紀にとって不幸な出来事だったが、あの日は柏木達也にとっても不幸な一日だった。柏木達也はマンション前で捜査にあたっていた。細い路地は黄色いテープで封鎖され、その外には野次馬が人だかりを作っていた。

中島兄弟もその中にいた。

二人は信也の部屋で会う約束があった。マンションに向かう道すがら、人ごみが目に入った。まだ何か起きて間もないのか、人ごみに向かって走っていく人もいる。

「何かあったんすか？」

早足でそちらへ向かうＯＬ風の女性に声をかけると、銃撃事件があったと教えてくれた。人と人との間を縫うように進み、テープの前まで来ると、

背広を着た男と紺色のジャンパーを着た捜査員が作業をしていた。地面
には散弾銃が転がっていて、それを独りの捜査員がカメラに収めていた。

「なあ、あれ」

健太の肩を軽く叩くと、勇太が顎で何かを促した。その方向には一人の
警官が立っていて、部下と思われる男に指示を与えていた。

「なんだよ」

と言いかけて健太もそれに気づいた。その男は自分たちから覚せい剤を
購入している客の一人だった。

「あいつ、警官だったのか」

驚きを隠せない様子の健太の脇腹を勇太が小突いた。

「声がでかいぞ」

健太が口をつぐんだ。

「前回あいつに売ったのっていつだったっけ？」

「メモを残してるわけじゃないから、はっきりとは。結構前だとは思うけど」

それを聞いて勇太が小さく頷く。勇太もひと月以上前だと記憶していた。

「じゃあ近々買い足しにくるだろうな」

勇太の口角が緩んだ。その視線の先には柏木達也が立っていた。

奈緒子の手が力なく襟を放した。柏木達也はタンブラーを一つ取り、

ピッチャーから水を注ぐと、それを少しだけ飲んだ。

「これ以上は限界だった。だが中島勇太は殺してない！」

柏木達也はうなだれていた顔を上げ、必死で訴えた。

「それに健太のときも事故だったんだ。あいつを部屋に運んだら、一緒にハイにならないか、って誘われて。兄貴の分の薬があるから、それをくれるって。殺すつもりなんてなかった！あいつの代わりに袋を

開けて、あいつが指示する分を打ってやっただけなんだ」

「ということは、工藤信也さんについては殺人を認めるんですね？」

圭はいつの間にか、空いた椅子に座っていた。

「ああ、だけどあれだって正当防衛だ。やらなきゃ私が殺されてた」

「嘘よ！」

奈緒子は涙を流していた。

「信也はそんなことしないわ」

圭が小さく首を振った。自分に対する否定だと勘違いした柏木達也が、

さらに必死な声を上げる。

「嘘じゃない！あいつは私が二人を殺したと決め付けて、私を襲って

きたんだ」

「三人であなたを脅していたわけですからね。二人が死ねば、次は自分だと思って焦ってもおかしくはない」

そこで古川正行が口を挟んだ。

「それなら遠藤さんを殺そうとしたのはどうしてです？そうなる原因を
作ったからですか？」
柏木達也はそれに答えず、また一口水を飲んだ。
「これはあくまでも推測ですが」
代わりに圭が話し出した。
「初めは自殺に見せかけて信也さんを殺すだけの予定だったのではない
ですか？ところが健太さんの事件について、僕が殺人の可能性を示唆したが
ために、誰か身代わりの犯人を用意する必要が生じた。脅して言うことを
聞かせるなら、女性の方が御しやすい。遠藤さんには動機もありましたし」
柏木達也が頷いた。再びタンブラーに口をつけてから、柏木達也が続けた。
「いつから私を疑っていたんですか？昨日の夜、遠藤さんの部屋で鉢合わせ

たとき？」

「初めに疑問を抱いたのは、あなたが健太さんを殺した夜です。あの日、

工藤信也が僕に言ったんです。島に来る前、あなたが僕らについて話していた

とね。おかしいじゃないですか。僕らが到着した日、あなたは僕らの名前も

覚えていない風だったのに。それに彼の口ぶりは、あなたと頻繁に会って

いるかのようでした。その上、信太郎さんが招待状を出したのは僕と遠藤さん

の二人だけで、あなたは工藤信也に招待されたという。なのに、あなた方は

顔見知りの素振りすら見せない。不自然でしょう？」

八月十八日　午前十一時二十分　（5）

お手上げです、という風に両手を挙げ、柏木達也が立ち上がる。

「どちらへ？」

圭が尋ねると、

「ちょっとトイレへ。水を飲んだら小便がしたくなりました」

そう言うと柏木達也は食堂を出て行った。

「一人で行かせていいんですか？」

松田玲子が不安そうに言った。圭はそれには答えず、古川正行に話しかけた。

「古川さん、頼んであったもの、持ってきてくれました？」

古川正行はエプロンのポケットから、イルカのキーホルダーがついた鍵を取り出した。それを見て松田玲子が再び尋ねる。

「それ、ボートの鍵じゃないんですか？」

「ええ。そうです。トラックの鍵もあります。これがなければ、

どこへ
逃げたって島からは出られませんからね」
圭がそう言って微笑むのとほぼ同時に、バイクのエンジン音が響いた。
窓の外をバイクに乗った柏木達也が通り過ぎた。それを見て、鍵を弄って
いた圭がゆっくりと立ち上がる。
「さて、追いかけましょうか。古川さん一緒に来てもらえます？」
二人が玄関を出たところで、後ろから有紀が追いついた。
「私も一緒に行きます」
三人がトラックに乗り込んだ。
「じゃあ古川さんは後ろに乗ってください」
圭がハンドルを握り、トラックは島の南側へ向かった。
「このトラックは犯罪現場の可能性がありますからね。なるべくなら
乗りたくなかったのですが、この際仕方ありません」
助手席に乗る有紀が不安そうに前を見つめる。

「バイクの姿が見えませんけど、大丈夫ですか？」
「心配ありません。港に係留しているボートの鍵がここにある以上、
島を出る手段は一つしか残されていないんですから」
路肩に乗り捨てられたマジェスティがあった。圭はそこでトラックを
停めた。そこは島に着いた日、圭が漂着したボートを見つけた海岸だった。
三人が木々の間を抜け、ゴミだらけの砂浜に下りると、柏木達也がボートの
船外機をスタートさせようとしているところだった。既にボートは海に
浮かんでいた。昨晩抜けた台風、その吹き返しの風が強く、波はかなり
高かった。押し寄せる波は、容赦なくボートを砂浜に押し戻す。声の届く
位置まで近づくと、圭が呼びかけた。
「無駄ですよ。エンジンは掛かりません」

柏木達也が訝るように圭を見た。

「こうなる可能性を考慮して、昨晩のうちに燃料をすべて捨てておきました」

圭は余裕の笑みを浮かべていた。それまででもっとも大きな波が押し寄せ、

ボートは再び砂浜に打ち上げられる。バランスを崩して柏木達也が転んだ。

斜めになったボートの上にふらふらと立ち上がると、観念したように砂浜へ

降りた。

一瞬の隙を突き、柏木達也が有紀を羽交い絞めにした。その手にはナイフが

握られ、切っ先が有紀の喉に突きつけられた。

「ボートの鍵はどこにある？」

圭にまっすぐ見据えられ、柏木達也が繰り返した。その顔はすっかり上気し、

珠のような汗が浮かんでいる。

「ボートの鍵だ！お前が隠しているんだろう！」

圭がポケットに手を突っ込み、イルカのキーホルダーを引っ張り出した。

「鍵は渡しても良い。だが遠藤さんと交換だ」

「駄目だ。鍵を渡すのが先だ」

くい気味に柏木達也が叫ぶ。ため息を一つつくと、圭が鍵を放った。それは

有紀の手前、一メートルほどの距離に落ち、砂に軽くめり込んだ。

八月十八日　午前十一時二十分　（6）

「拾え」

柏木達也が有紀に命令した。有紀が鍵を拾うためにしゃがむ。喉元に

ナイフを突きつけたままの柏木達也も、自然としゃがむ。

圭はこの瞬間を待っていた。あっという間に距離を詰めると、ナイフを

握る手を左手で掴んだ。そのまま右ストレートを柏木達也の顔面に叩き込む。

浅い。

踏ん張っていた左足が、砂にずぶずぶと沈み、ストレートの威力を半減

させた。ナイフが落ち、砂浜に刺さる。有紀は柏木達也の手を振り解き、

走って逃げた。バランスを崩した圭が膝をついた。その間に柏木達也は

鍵を掴み、バイクに向かって走った。

立ち上がった圭の左手からは、鮮血が滴っていた。その手にハン

カチを
巻きながら、柏木達也の背中に向かって叫ぶ。
「柏木達也！その鍵ではボートのエンジンはかけられないぞ！」
それを聞いて、柏木達也が振り返った。視線の先で、圭が一本の鍵を
摘んでいた。
「寄こせ！」
柏木達也が引き返し、圭に飛び掛った。
「ぐうっ」
鈍い音を立て、圭の左拳が柏木達也の腹部に沈んだ。腹を押え、
柏木達也が体を屈めた。その拍子に顎が前に突き出される。その顎
めがけ
て、右フックが繰り出された。圭の右拳が顎の先端を正確に捉え、
柏木達也は砂浜に倒れ込んだ。
「すみません。私のせいで」
圭が笑顔で首を振る。

「遠藤さんのせいじゃありませんよ」
柏木達也を後ろ手に縛る手伝いをしながら、古川正行がこぼした。
「まさか鍵を入れ替えてあるなんて。いったい何手先まで読んで、策を巡らせているんです？」
圭はしれっと答えた。
「いや、彼が持っていたのは、本物のボートの鍵ですよ。僕が持って
いた方が遠藤さんの部屋の鍵です」
古川正行が有紀と顔を見合わせた。
「一度、彼は鍵のすり替えトリックに引っかかってますからね、今回も
やられたと思ったんでしょう」
圭がくすくすと笑った。
圭と有紀はホテルの部屋で、ツインのベッドに腰掛けていた。圭の左手には包帯が巻かれている。
砂浜でのもみ合いから三十分後、県警のヘリが到着し、十人近い捜査員が

島に降りた。左手を切っていた圭は病院に直行したが、その傷は浅く、

縫い合わせる必要もなかった。翌日、警察で事情を聞かれることになり、

全員が博多に残ることになった。

「一時はどうなることかと思いました」

圭が大きなため息をついた。

「でも、本当に大丈夫でしょうか」

有紀が不安そうにこぼした。

「大丈夫、僕が請けあいます。あなたが勇太さんを刺してしまったことは

バレません」

八月十五日　午後二時　（1）

中島勇太が遺体で見つかる数時間前。圭が部屋で一人、文庫本に目を
落としていたとき、ベッドの上に放り出してあった携帯が鳴った。
着信の
相手が有紀であるのを確認し、通話ボタンを押す。
受話器の向こうから嗚咽が漏れてきた。
「遠藤さん？どうしたんです、大丈夫ですか？」
「あの、あの、私…」
ただならぬ様子に、圭の表情が険しくなった。
「今どこにいるんですか？」
有紀はしゃくりあげていて、質問になかなか答えられない。
「か、海岸に」
ドアに向かっていた圭の足が止まった。
「海岸？どうしてそんなところに」
「水野さん、助けてください。私、私、人を殺してしまいました」

圭はぎゅっと目を瞑ると、心の中で三つ数えた。精神を落ち着け、ゆっくりと目を開ける。

「詳しく説明してもらえますか？」

「私、中島勇太にトラックで海岸に連れてこられたんです。ナイフで脅されて、抵抗したら、ナイフが相手の胸に」

そこまで言うと、再び嗚咽だけが漏れ聞こえてきた。

「その状況なら正当防衛が主張できるかもしれません。どうして僕に何も言わず

について行ったりしたんですか」

「あの、テ、テープが」

「テープ？」

圭はベッドに腰を下ろした。途切れ途切れに有紀が話し始めた。

「私が、その、工藤信也としているテープがあって。それを返して欲しかったら、

黙って一緒に来いって言われて」

たっぷりと時間をかけて聞き出した結果、圭にも話の内容が読めてきた。要するに

中島勇太は、有紀を脅迫して手篭めにしようとしたのだ。悪いことに有紀にもすねに

傷があった。工藤信也とのセックステープがあったのである。それを撮ったときは

相当酔っていたらしい。あとから後悔したが、いくら頼んでも工藤信也はテープを

破棄してくれなかった。どういう経路かはわからないが、中島勇太がそれを手に

入れ、脅迫のネタに使ってきたのだった。

「とにかく落ち着いて。それと正当防衛の件は忘れてください」

「どうしてですか？」

電話の向こうで有紀が鼻をすすった。

「裁判になれば、そのテープを証拠として提出しなくてはならなくなります。

そうなれば大勢の目に触れてしまう」

「そんな」

「目には触れなくても、テープの存在は周りに知られてしまいます。おそらく
大学職員の職も失うことになる」
沈黙が返ってきた。言葉を失っているらしい。
「もしもし、遠藤さん？聞いてますか？」
「はい、聞こえています」
今にも消え入りそうな声で有紀が答えた。
「とにかく今から僕がそっちに行きますから、場所を教えてください」
圭は場所を聞くと、その場を動かないように言って電話を切った。すぐに
部屋を出ると、古川正行を探してバイクの鍵を借りた。有紀が指輪をなくした
のは事実だったし、嘘は最小限にして別荘を出た。

八月十五日　午後二時　（2）

圭はトラックを見つけると、タイヤ痕が残らないように、アスファルトの上に
バイクを停めた。有紀はトラックの脇に座り込んで震えていた。激しい雨で
びしょ濡れになっていて、束になった髪からは滴がたれていた。圭の姿を
見つけると、弾かれたように駆け寄ってくる。

「どこか怪我はしていませんか？」

震える有紀をぎゅっと抱きとめると、改めて尋ねた。

「大丈夫です」

圭が車内を確認すると、運転席で中島勇太が事切れていた。胸のちょうど
真ん中辺りに、ナイフが刺さっていた。グリップ部分の構造が複雑な、
ダイビングナイフだったら厄介だと思っていたが、その心配は杞憂に終わった。
刺さっていたのは、溝のない、ツルリとした握りのナイフだった。

ナイフを
抜いていなかったので、出血が少ないのも幸運だった。こめかみを揉みながら
圭が考え込む。
「テープは？」
有紀がポケットからテープを取り出した。
「別荘を出るところを誰かに見られましたか？」
少し離れた場所で有紀が首を振った。
「誰にも見られないように、気をつけて出てきたんです。弟にも邪魔
されたくないとか言って」
「そうですか。それは良かった」
振り返って、有紀が薄手のシャツを一枚着ているきりであること
に気が付いた。
雨に濡れ、下着が透けている。圭は着ていたレインウェアを脱ぐと、
それを
有紀に着せた。

「いいですか？今からいくつか処理をして、二人で別荘に戻ります。あなたは

今日の午後、部屋を一歩も出なかった。髪が濡れているのはシャワーを

浴びたからです。いいですね？」

ぽかん、と口を開けたまま有紀が固まった。

「いいですね？」

念を押されて、有紀が頷いた。圭は車内に乗り込むと、ナイフの取っ手に

付いた指紋を丁寧に拭き取った。そして中島勇太の爪の間を念入りに確認した。

ひょっとすると有紀の皮膚が挟まっているかもしれない、と考えたからだ。

爪の間は綺麗だった。圭は中島勇太の両手を取ると、ナイフを逆手に握らせた。

助手席のロックをかけると、そのままドアを閉めた。

「後ろに乗ってください。ヘルメットも貸してあげたいところですが、

この雨ではヘルメットがなければ運転はできません。すみませんけ

ど我慢して
くださいね」
そんなことはどうでもいい、とばかりに首を振り、有紀が圭の腰に手を回した。
有紀を後ろに乗せ、別荘のすぐ傍まで戻ってきた。別荘の数百メートル手前で
エンジンを切ると、バイクを押して別荘に近づいた。
「ここで待っていてください」
有紀の耳元でそう囁くと、圭が姿勢を低くして窓に近づいた。窓からロビーを
覗くと、低い姿勢のまま戻ってくる。
「ロビーに人がいます。このままでは中に入れない。僕が何とかしますから、
人がいなくなったら部屋に戻ってください」
有紀からレインウェアを受け取ると、圭がドアを開けて別荘の中に入っていった。
それは三人が外へ出ようとするのとほぼ同時。実にきわどいタイミングだった。

戻るのがもう少し遅れていたら、外で鉢合わせしていたかもしれなかった。

「僕も手伝います。二人で探せば時間も半分で済みますよ」

圭は平静を装い、捜索の手伝いを申し出た。圭はバイクの給油を口実に、三人を外に連れ出した。このときドアの陰には有紀が隠れていたが、三人は気が付かなかった。雨と風に目を細めていたことも幸いした。入れ替わりに有紀が別荘に入り、部屋に戻って服を着替えた。そして階段を下りてきたところに、四人が戻ってきた。

計画は順調に進んでいるように思えた。圭がトラックのあった場所に戻り、助手席の窓を割った。ドアを開けてびしょびしょに濡れた体を滑り込ませ、有紀が座っていた痕跡を消す。その後も割られた窓から雨が入り続け、証拠を洗い流してくれた。あたかも捜査を手伝うようにして、圭は証拠の汚染を続けた。圭は計画の成功を確信していた。

八月十六日　午前八時三十五分

予想外の事態が起こったのは、翌々日のことだった。

中島健太の遺体を前にして、少しずつ歯車がズレ始めたのを感じた。

柏木達也と部屋を検め始めて間もなく、圭はこの部屋に中島健太以外の

第三者の痕跡があることに気が付いた。

どの選択がベストだ？

選択肢は二つしかなかった。一つはこのまま傍観し、中島健太の死に

ついては警察にまかせること。もう一つは自らが犯人を探し出すこと。

しかし少し調べれば、この部屋に第三者の痕跡が残っていることくらい、

警察もすぐに掴むに違いなかった。そうなった場合、単に自殺として処理

されるはずだった勇太の死に、再び関心が集まってしまう可能性がある。

「水野さん聞いてます？」

柏木達也の質問は聞こえていなかった。圭の頭脳はそれぞれの選択肢を

選んだ場合、そのシミュレートにフル回転していた。

古川夫妻が食事を用意してくれるまで、少し時間が空いた。圭は薄暗い

娯楽室で、壁を叩きつけた。

「くそっ。なんでこんなことに」

室内に思ったより大きな音が響いた。それを聞きつけて、心配そうな

顔をした有紀が入ってきた。

「どうしてこんなことになってしまったんでしょうか」

圭が大きなため息をついた。

「わかりません。ともかく用心しないと」

こめかみをぐりぐりマッサージしながら圭が呟いた。食事ができたらしく、

食堂から古川正行の呼ぶ声が聞こえた。

この晩、圭は有紀の部屋を訪れた。

「中島健太のことですが、恐らく自殺ではありません」

二人は並んでベッドに腰掛けていた。

「彼が薬を打ったとき、他の誰かが部屋にいた形跡があります」

有紀が不安そうな顔を上げた。

「どうしましょう。一昨日のことまでバレてしまったら」

「正直に言って、状況は良くありません」

有紀がうなだれる。

「事故にしろ殺人にしろ、自殺に見せかけている点が特にまずい。犯人が気づいているとは思えませんが、僕らと同じことをしたわけです。

しかもかなりお粗末に。警察もすぐに自殺ではないと気づくでしょう。

そうなれば、もう一件も同じ視点で捜査するかもしれない」

安心させるように、有紀の手を握る。

「そこで計画を少し変更します」

「変更？」

「僕は犯人を特定します。言い逃れできない状況にして、警察に引き渡す。

当然中島勇太は殺害していないのですから、その点は認めないでしょう。

ですが、そうすることで余計な疑いをかけられずに済むかもしれません」

有紀は顔を上げ、圭を見上げた。

「本当に？そんなことが可能なのですか？」

「大丈夫」

圭が微笑みかける。

「既に容疑者は絞ってあります。台風が去るまで時間もある。大丈夫ですよ」

この時点で圭は容疑者を二人に絞っていた。工藤信也と柏木達也の二人である。

過剰摂取という死因からは、中島健太の薬物常習を知っていた者の犯行が

疑われた。このときはまだ柏木達也の薬物常習がわかっていなかったので、

この点から工藤信也が浮かんだ。そしてもうひとつ。前の晩に工藤信也が言った

言葉から、柏木達也が中島兄弟と、そして工藤信也と親しかった可能性を疑っていた。

八月十七日　午後二時　（1）

圭が消石灰を落とし、シャワーから出ると、ベッドの端に有紀が腰掛けていた。

遠い目を窓の外に向けている。バスタオルをくしゃくしゃとまとめ、隣に座った。

「気分悪くないですか？」

問いかけに対し、有紀が僅かに頷いた。

それきり何も言わない圭のほうに顔を向けた。

「水野さんこそ、大丈夫ですか？」

微笑むことで圭が答えた。

「たぶん、犯人を特定できたと思います」

有紀が目を見開いた。その表情が一瞬で曇る。圭の顔には笑みが浮かんでいたが、

その眉間にはわずかにしわが寄っていた。

「あまり嬉しそうじゃありませんね」

圭が視線を床に落とす。

「問題が二つ残っているんです」
横顔に僅かに首を傾げた有紀の視線を感じる。
「証拠がないんです。現段階では。これでは問い詰められない」
「もう一つは何ですか？」
圭は顔を上げ、有紀をまっすぐに見つめた。
「次に狙われるのは、最後に狙われるのは、おそらくあなたです」
言葉の意味が理解できず、有紀が静止した。一瞬の間を置いて、困惑したように
笑う。
「なんで私が。なんでそんなことになるんですか？」
「僕が犯人の立場だったら、絶対に用意しておくものが工藤信也の部屋には
ありませんでした」
有紀の視線が部屋の中を泳ぐ。
「遺書です。自分が犯した罪を誰かに着せ、自殺にみせかけるなら、それを
用意しないはずがない」

説明に納得したような表情を浮かべたが、すぐにそれは引っ込んだ。

「やっぱりよくわかりません。それでどうして私が殺されるんですか？」

「遺書を用意しなかったのか、なにか理由があってできなかったのかはわかりません。大の男を脅して遺書を書かせるのは容易じゃないでしょうしね。どちらにしてもそれがない以上、これから用意するのだと思われます。その相手があなたなのは、中島健太、工藤信也の両方を殺す動機があり、かつ遺書を書かせるのが比較的容易そう、この二つの条件を満たすからです」

言葉を失い、今度は有紀が視線を落とした。

「心配しないでください。それをわかっていて、みすみす殺させやしません。それにもともと遺書を用意するつもりがない、という可能性もある」

圭が形ばかりの慰めを口にする。ついさっき「自分なら絶対用意する」と言った

ばかりだ。

「ただし、遠藤さんの安全のためにも、そうなるという仮定の元に対策を立てます」

思いついたように、有紀が視線を上げた。

「ところで彼って誰なんです？」

ああ、まだ言っていませんでしたね。

ほんの些細なことだ。

そんな雰囲気で圭が言った。

「柏木達也でほぼ決まりでしょう」

先ほどよりもさらに大きく、有紀の目が見開かれた。

「だって、あの人は警官ですよ？」

ゆっくりと首を横に振って、圭が答えた。

「そんなことは関係ありません。警官だろうが神父だろうが、人である以上犯罪を

犯します」

有紀が言葉を失う。

「いいですか。天気は回復傾向にあるようです。となれば彼はすぐにでも動くでしょう。あなたが独りになるタイミングを狙ってくるはずです」

不安そうな顔の有紀の手をとった。

「そこでこちらから先手を打ちます」

八月十七日　午後二時　（2）

圭の目がまっすぐに見つめる。

「先手、ですか？」

圭が頷く。

「あえて独りになる時間を作るんです。この場合誘い込む、と言った方が

いいかもしれませんね」

有紀が輪をかけて不安な表情を浮かべた。

「大丈夫。完全に独りにするわけじゃありません。僕がすぐ傍に待機します」

圭は有紀に作戦を話した。

この晩は二つの幸運が重なった。一つは古川正行が明日島を出られる

という言葉を口にしたこと。古川正行は場を明るくしようとしただけだっ

たが、結果的にこれは柏木達也にプレッシャーをかけた。もう一つは松田

玲子が書類作成の手伝いを頼んだことだった。これがなくても、圭はなにかしらの理由をつけて食堂か娯楽室に残るつもりだった。柏木達也を
おびき寄せるため、有紀を一人にする必要があったからだ。これによって
圭は自然に食堂に残ることができた。
書類の作成が終わり、松田玲子と話していたとき、圭の携帯が着信を
告げた。一瞬冷やりとするが、あくまでも自然に携帯を手に取り、メールを
開く。
「寂しいです。早く戻ってきてください」
有紀からのメール。圭はこれを待っていた。心のどこかでは来ないで
欲しいと願いながら。柏木達也が部屋を訪れたら、ドアを開ける前に、
圭にメールを送ることになっていた。まったく関係のない文面で。
このメールがそれだった。あとから警察に見られたとしても、これが

柏木達也の来訪を伝える暗号だとはまずわからない。

メールを見て圭は食堂を出た。つい早くなりそうな足を抑え、ゆっくり

と階段を上がる。ドアの脇に立ち、じっと耳をそばだてた。

もう一つ、二人の間だけで決められた合図があった。もう限界だ、と

いうときには何か大きな音を立てること。

そわそわとしながら、けれどそれを決して表には出さず、圭はじっと

立っていた。

着替えの間、少し待っているだけです。

という風を装って。

そして取り決めに従い、有紀は椅子を倒した。それを聞いて圭がドアを

ノックする。僅かに間を空け、立て続けにドアを叩くことで、柏木達也は

ドアを開けざるを得なかった。

柏木達也の言葉を聞き、駆け寄ったのは演技ではなかった。
―間に合わなかった。
ベッドに横たわる有紀が見えたとき、本気で手遅れになったのではないか
と思った。当初の計画では、遺書を書き終える前に合図をするはずだった。
そしてその場で柏木達也を取り押さえるつもりだったのだ。ところがきっかけが掴めず、タイミングがぎりぎりになってしまった。
有紀の上に屈み込み、息があるのを確認したとき、圭は肩の力が抜けるのを
感じた。ほっとするのと同時に、圭の脳裏にさらなる計画が浮かぶ。それと
同時に、有紀の唇に人差し指を軽く押し当てた。
「部屋を出ましょう。彼女がすべてを告白して死んだなら、これ以上現場を
荒らしたくない」
圭は遺書の内容を確認すると、鍵をすり替え、柏木達也を部屋から連れ出

した。

電話で話を聞いた圭は、一度別荘まで戻り、ガレージに入った。有紀を忍び込ませたときと同じように、エンジンを切って離れた場所にバイクを置き、徒歩で近づく。携帯のライトを片手にガレージを物色し、灯油ストーブ用のポンプを見つけると、それを手にボートが漂着していた海岸を訪れた。そして残っていた燃料を抜いた。

追い詰められた柏木達也が、逃亡を図ることは容易に予想できた。そうできないように、組み伏せてしまっても構わない。けれど、できればそうはしたくなかった。

圭は全員の前で犯人を明らかにするつもりだった。そうしないと、有紀が出てきたときに無用な混乱を引き起こしかねないからだ。それは説明が一度で

済むというメリットがあったが、同時にあるデメリットあった。この方法だと
同じ空間に松田玲子や工藤奈緒子、古川夏美も居合わせることになってしまう。
そこでもみ合いにでもなれば、けが人が出るか、下手をすると人質を取られて
しまう可能性があった。
一度逃がしてしまおう。
それが圭の選んだ結論であった。柏木達也を外に出し、そこで改めて捕まえる。
それならば周りにいる人も減り、リスクを減らすことができる。工藤信太郎所有
のボートの鍵がなければ、柏木達也は漂着したボートを使うしかなくなる。
柏木達也を逃がすことは、もうひとつのメリットを生んだ。捕まえた柏木達也を
運ぶには車がいる。島に例のトラック以外に車はないから、どうしてもそれに
乗る必要が生じた。この追跡劇に有紀が加われば、偶然を装って有紀をトラックに

乗せることができる。そうすればトラック内に有紀の痕跡があっても、なんら不自然

ではなくなる。木を隠すなら森に隠せ。これで中島勇太の一件でも、有紀に嫌疑が

掛かる可能性を更に減らすことができる。

八月十八日　午後十時

圭が有紀を見つめて言った。

「これから先、警察に事情を聞かれます。もしかすると裁判で証言しなくてはなら

なくなるかもしれません。ですがあなたがつかなくてはならない嘘は一つだけです。

あの日の午後、あなたは部屋にいて、別荘からは出なかった」

有紀が不安そうに頷く。

「大丈夫、この辺のことは聞かれるとしても、事情聴取のときでしょう。裁判では

ないので、偽証罪に問われることもありません」

「ですけど、私が中島勇太を刺したことがきっかけになって、二人も人が死んでし

まいました」

圭は首を横に振った。

「それをあなたが気に病む必要はありません。元はといえば、彼らが薬に手を出して

いたことが原因です」

何も言わずにうつむいている有紀に圭が続けた。

「それに中島勇太の死ついて彼が罪に問われることはないでしょう。やっていないも

のをやったとは言わないでしょうし、彼が殺した物証もありません。当たり前です

けどね。仮に他殺の痕跡が残っていたとしても、山のような痕跡の中に埋もれてし

まっています」

それを聞いて有紀の表情が少し軽くなった気がした。

「結局、なぜ水野さんまで呼ばれたんでしょうね」

わからない、という風に両手を持ち上げた。

「自分がたいした罪に問われていない、というアピールをしたかったのかもしれません。

まあ、今となってはわかりませんがね」

彼が死んでしまった今となっては、という意味を言葉の裏に読み取り、有紀が視線を

落とした。

「ああ、そうだ」

圭が思い出したようにポケットを探った。

「手を出してください」

顔に不安を浮かべたまま、有紀が手を出した。圭が開いた右手を差し出し、その上に

重ねる。開いた手をぎゅっと握ると、再び右手を開く。その手から指輪が落ちた。

「ジーンズの折り返した裾から出てきたんです。バタバタしていて忘れていたんですけど」

開いたままの掌から指輪を拾い上げると、圭は有紀の指に指輪をはめた。

八月十八日　午後十時（後書き）

「硬貨は掌の中に」は今回の更新を持って終了となります。

半年以上にも渡って長々とお付き合いいただき、ありがとうございました。

せいぜい数人かななどと思っていたのですが、予想以上に沢山の方に読んでいた

だけたようで驚いています。

今まではショートショートのようなものばかり書いてきていて、これほど長く

書いたのは本作が初めてでした。長くなれば長くなるほど目立つ語彙力と表現の

バリエーション不足。もっと精進しなくてはと反省しきりです。

結末自体もアクロイド殺しのような形式となってしまいました。探偵自身が犯人で

あったアクロイド殺しには賛否あるようで、もし不快に思われた方がいたら

すみません。

作者としては少しでも楽しんでいただけたなら、それで満足です。

最後になりますが、本当に長々とお付き合いいただき、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7804j/

硬貨は掌の中に

2010年11月1日12時15分発行